



地域教育創造フォーラム（2023）

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮前, 耕史, 大畑, 伸幸, 皆川, 敬太, 貴志, 淳一, 本間, 玲子, 半澤, 礼之, 角田, 淳, 本間, 里奈 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000214

[シンポジウム報告]

地域教育創造フォーラム（2023）

宮前耕史・大畑伸幸・皆川敬太・貴志淳一・本間玲子・半澤礼之・角田 淳・本間里奈



対面参加者による記念写真



会場風景（大畑伸幸氏による講演の様様）



会場風景（ワークショップの様様①）

- 13：30 開会挨拶・趣旨説明 宮前耕史（北海道教育大学釧路校）
- 13：45 講演「ひとが育つまち益田のひとづくりと地域づくり」大畑伸幸
（元益田市教育委員会ひとづくり推進監・社会教育課長事務取扱、ネイチャーキッズ寺子屋代表）
- 14：45 休憩
- 15：00 ワークショップ（オープン・スペース・テクノロジー）
- 16：00 感想共有・これからの私
- 16：20 閉会式
- 16：30 閉会

司会：岡部真夢（北海道教育大学釧路校地域文化研究室2年）

江尻翔哉（ ）

グラフィック・レコーディング：本間里奈

* 本研究はJSPS科研費21H00851の助成を受けたものです。

地域教育創造フォーラム（2023）ポスター

道東の地域教育をつくる会

\ オンラインと対面のハイブリット開催！ /

地域教育創造フォーラム

令和5年
12月9日(土)

2023

13:30~
16:30会 場：北海道教育大学釧路校403講義室（対面）又はオンライン（zoom）
参加費：無料（普段着でおこしください）

* オンラインでの参加（視聴）は講演までとなります。ワークショップに参加することはできません。
* オンラインで参加する場合、音声聞き取りにくい場合があります。また、オンラインでの質問やコメントは
お受けすることができません。
* 対面参加の定員は100名です。定員に達し次第、べ切となります。

こども

地域 学校

地域づくりは人づくりです。学校・地域住民・行政が連携・協働し、地域づくりに向けた人づくり（持続可能な地域・社会・未来の創り手の育成）を行っていく必要があります。社会教育を中軸として学校と地域住民・行政をつなぎ、全市をあげて「ひとづくりを通じた地域づくり」に取り組む島根県益田市の「ライフキャリア教育」に学びます。

【プログラム】

- 13:00~13:30 受付
13:30~13:45 開会式・趣旨説明
13:45~14:45 講演「ひとが育つまち益田のひとづくりと地域づくり」
大畑伸幸氏（元益田市教育委員会ひとづくり推進監・社会教育課長事務取扱、ネイチャーキッズ寺子屋代表）
14:45~15:00 休憩
15:00~16:00 ワークショップ
16:00~16:20 感想共有・これからの私
16:20~16:30 閉会式

【益田市のライフキャリア教育】

従来のキャリア教育が「ワークキャリア教育（仕事探し）」に偏り、「地域で生きること、いかに生きるのか」といった視点が足りなかったとの反省から、益田市で取り組まれる持続可能な地域づくりのためのひとづくりの取り組み。社会教育を中軸に、行政の縦割りを越え横断的に施策を展開。学校や公民館を拠点に益田でいきいきと生きる魅力的な大人と子どもたちとの出会いの場づくりをすることで、地域につながりと元気が生まれている。

※大畑伸幸氏および益田市のライフキャリア教育については、大畑伸幸（2018）『島根県益田市発 公民館が未来の担い手育成！～公民館は人材インキュベーション～』『社会教育』2018年11月号参照。

【大畑伸幸氏】

1962年益田市生まれ。小学校8年・中学校10年・社会教育20年と様々な教育現場を体験。益田市における「ライフキャリア教育」を主導。2014年度より2度目の教育委員会勤務。2017年度より益田市教育委員会ひとづくり推進監・社会教育課長事務取扱（社会教育課は2021年度に協働のひとづくり推進課に改称）。2023年3月に益田市教育委員会を退職、全国各地で研修会・講演会等の講師として活躍。ネイチャーキッズ寺子屋代表。



参加申し込み方法

【申込べ切】
12月1日(金)

Googleフォームからお申し込みください
(<https://forms.gle/XB482brpRH4u8x1T8>)
オンライン参加でお申込みいただいた方には後日zoomミーティングIDを送付いたします。事前に最新版へ更新をお願いします。

駐車場について



【主催・後援・協力等】

主 催 道東の地域教育をつくる会
共 催 北海道教育大学釧路校地域文化研究室
後援（予定）北海道教育庁釧路教育局 北海道教育庁根室教育局、北海道教育庁十勝教育局、釧路市教育委員会、釧路管内町村教育委員会連絡協議会、根室管内市町教育委員会連合会、十勝管内教育委員会連絡協議会、釧路市、北海道釧路総合振興局、北海道根室振興局、北海道十勝総合振興局、釧路商工会議所、北海道教育大学釧路校

【お問い合わせ】

道東の地域教育をつくる会代表 宮前耕史 Email: doutou.tikikyoku@gmail.com
本事業はJSPS科研費21H00851（研究代表者：宮前耕史）の助成を受けたものです。

開会挨拶・趣旨説明

～「人づくりと地域づくりの好循環」の創出と「社会に開かれた教育課程」の本質～

宮 前 耕 史

(北海道教育大学釧路校)

1. 「道東の地域教育をつくる会」について

みなさまこんにちは。会場のみなさま、それからオンラインでご参加いただいておりますみなさま、本日は地域教育創造フォーラム（2023）にお越しいただき、大変ありがとうございます。行きがかり上、主催の「道東の地域教育をつくる会」の代表ということになっております宮前と申します。開会にあたり、まず、私の方から本日のフォーラムの趣旨説明とスケジュールについて、ご案内をさせていただきます。

「道東の地域教育をつくる会」ですが、道東地域の持続可能性の実現に、教育分野で貢献したいと考える有志の会です。北海道教育大学釧路校、地域文化研究室の学生を中心に、学校の先生方や、教育行政・社会教育・NPOの職員、その他関係者等を会員として、道東地域に、人づくりと地域づくりの好循環を創出することを目指しています。道東地域の持続可能性の実現に教育分野で貢献するというのは、具体的にはそのようなことを意味するのではないかと考えているところです。

年1回、フォーラムを開催しまして、課題意識を共有すると同時に、関係者のネットワークづくりを行っているというのが具体的な活動の中身です。それが本日のフォーラムということになり、今年で第6回目ということになります。これまでのフォーラムの様子は、釧路校ESD推進センターの発行する「ESD・環境教育研究」という冊子でご覧になっていただけますので、ご関心ある方は、ぜひお読みいただけましたら幸いです⁽¹⁾（【図0-1】）。

2. 学習指導要領改訂の核心

さて、学習指導要領の改訂（H29・30・31年）にあたり、その歴史上、はじめて「前文」を設けてまで確認しなければならなかったこと、それは、学校は「持続可能な地域・社会・未来の創り手」をつくるどころ、場所であり、制度なのだということでした。つまり、学校教育とは、それそのものが目的であるというわけではなく、何か目的を達成するための、あくまでも「手段」であるということ。そして、その目的こそが、「持続可能な地域・社会・未来の創り手」をつくるということなのだ、ということでした。学校は、それそのものが目的であるというわけではなく、何か目的を達成するためのあくまでも「手段」なのだということ、このことは、繰り返し確認されてよいように思います（【図0-2】）。

何を今さら当たり前のことをと思われるかもしれませんが、しかしそういった当たり前のことを改めて確認しなければならないまでに、学校教育そのものが目的となってしまうということのように思います。学校教育が「学校内に閉じ」たものとなってしまっていたというのは、そうした事態への反省を述べたものと思われるわけですね⁽²⁾（【図0-3】）。

学習指導要領改訂そして現在進行形の教育改革の核心は、学校と地域が連携・協働して、「持続可能な地域・社会・未来の創り手」をつくる、探究的で、課題解決的な学びをつくることで、子どもたちを「持続可能な地域・社会・未来の創り手」として育てると同時に、人を育てる地域をつくり、学校を核として、人づくりと地域づくりの好循環を創出すること。そしてそのことにより、持続的な地域・社会・未来を実現していくことということ

⁽¹⁾ 北海道教育大学釧路校ESD推進センター2019『ESD・環境教育研究』第21巻第1号、同第22巻第1号（2020年）、同第23巻第1号（2021年）、同第24巻第1号（2022年）、および同第25巻第1号（2023）。


⁽²⁾ 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会平成28年6月26日「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ 補足資料（1）」。ENGSTRÖM, YRJÖ1991 “NON SCOLAE SED VITAE DISCIMUS: TOWARD OVERCOMING THE ENCAPSULATION OF SCHOOL LEARNING” Learning and Instruction, Vol.1, pp.243-259. 香川秀太2011「『越境の時空間』としての学校教育—教室の外の社会に開かれた学びへ」茂呂雄二・田島充士・城間祥子編『社会と文化の心理学—ヴィゴツキーに学ぶ』世界思想社。

道東の地域教育をつくる会

【課題意識・趣旨・目的】

- ・道東地域の持続可能性の実現に教育分野で貢献したいと考える有志の会。
- ・北海道教育大学釧路校地域文化研究室の学生を中心に、学校教員や教育行政・社会教育・NPOの職員、その他関係者等を会員として、道東地域に人づくりと地域づくりの好循環を創出することを旨とする。
- ・年1回フォーラムを開催、課題意識を共有すると同時に、関係者のネットワークづくりを行う（今回で第6回目）

※北海道教育大学釧路校ESD推進センター『ESD・環境教育研究』第21巻第1号～第25巻第1号。



【図 0-1】道東の地域教育をつくる会

学習指導要領改訂（H29・30・31）で改めて確認されたこと

- ・学校（教育）とは、それそのものが目的であるというわけではなく、何か目的を達成するための、あくまで「手段」である。
- ・その目的こそが、持続可能な地域・社会・未来の創り手をつくるということ。
- ・すなわち、学校とは、持続可能な地域・社会・未来の創り手をつくること、場であり、制度であるということ。

→そのためこそ、教育課程は「社会に開かれた」ものでなければならない。

【図 0-2】学習指導要領改訂で確認されたこと

これからの教育課程の理念

<社会に開かれた教育課程>

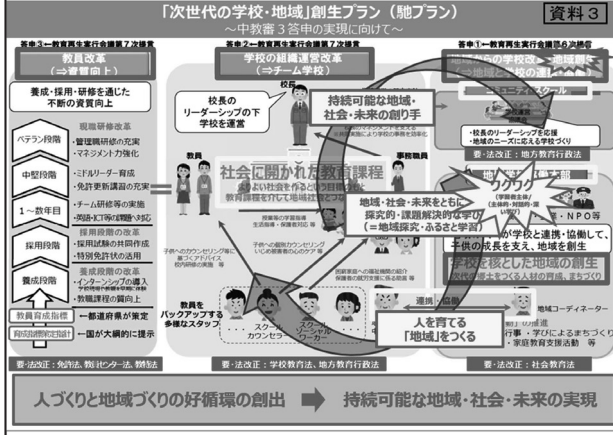
- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったり、学校教育を学校内に閉じず、目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

文部科学省「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）補足資料（1）JH28年8月26日教育課程部会（https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_4_1.pdf）

【図 0-3】「これからの教育課程の理念」としての「社会に開かれた教育課程」

「次世代の学校・地域」創生プラン（馳プラン）

～中教審 3 答申の実現に向けて～



人づくりと地域づくりの好循環の創出 → 持続可能な地域・社会・未来の実現

文部科学省HP（https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/01/_icsFiles/afieldfile/2016/01/26/1366426_3.pdf）（一部改訂）

【図 0-4】「次世代の学校・地域」創生プラン（馳プラン）

にあるように思います（【図 0-4】）。「社会に開かれた教育課程」やコミュニティ・スクール、地域学校協働本部、あるいは地域学校協働活動といったものは、そうしたことの実現に向け、学校と地域が連携・協働していくための具体的な道具立て、仕組みや仕掛けということができるとでしょう。

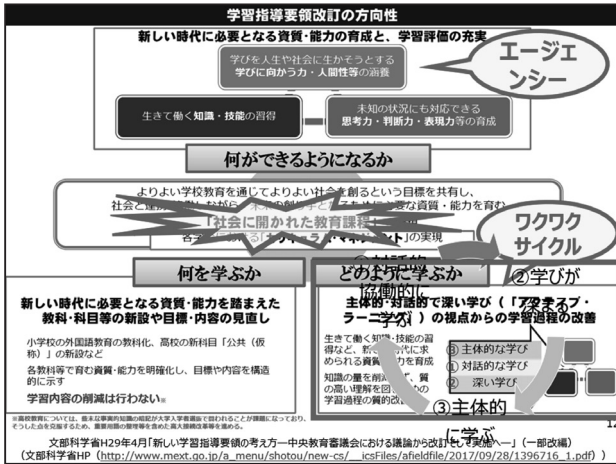
3. 「拡張的学習」と「エージェンシー」、「学びに向かう力」

キーワードは「ワクワク」ということだと、私は思っ

ています（【図 0-4】）。

「主体的・対話的で、深い学び」という言葉は、現行学習指導要領の目指す学習の姿として、みなさんよくご存じだと思います。順番として①「主体的で」→②「対話的で」→③「深い学び」と言ったりしますが、これは語呂が良いからこのように言っているだけで、私は順番としては、①「対話的な学び」→②「深い学び」→③「主体的な学び」という順番ではないかと考えています⁽³⁾（【図 0-5】）。つまり、人は対話的、あるいは協働的に学ぶからこそ、学びが深まる（「深い学び」）。すると、そこに「ワクワク」が生まれ、主体的に学ぶよう

⁽³⁾ 文部科学省平成 29 年 4 月「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」。白水始 2020『対話力—仲間との対話から学ぶ授業をデザインする！』東洋館。



【図0-7】どこを「社会に開く」のか

りの好循環が創出される。こうした過程が、学校にとっては、「地域とともにある学校づくり」となり、地域にとっては、「学校を核とした地域づくり」となります。

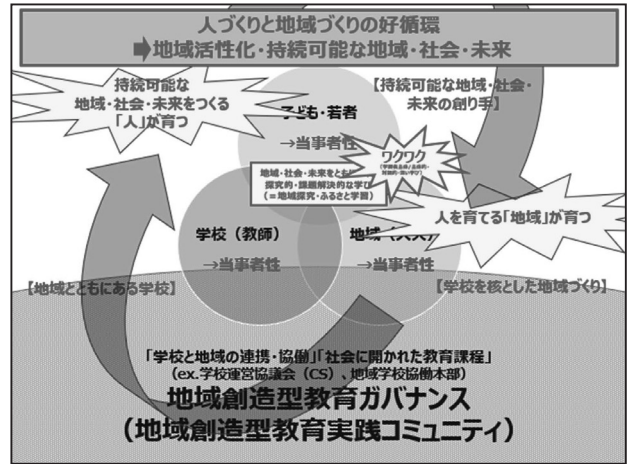
繰り返しになりますが、「社会に開かれた教育課程」や、コミュニティ・スクール、地域学校協働本部・活動といったものは、こうした地域における人づくりと地域づくりの好循環の創出に向け、学校と地域が連携・協働していくための、具体的な道具立て、ということができ

4. 「人づくりと地域づくりの好循環の創出」の条件

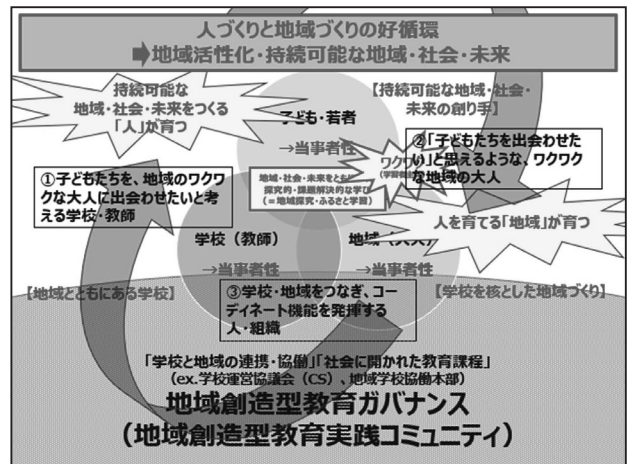
一方で、このようなやり方で、地域に人づくりと地域づくりの好循環を生み出していくためには、いくつかの条件なり前提なりが必要になってくるように思います。

それは、第一にはそうした「社会に開かれた教育課程」や「学校と地域の連携・協働」の意義を正しく理解し、子どもたちの「ワクワク」のきっかけを、「学校の外」、つまり地域や地域の大人たちとの出会いにこそ求め、子どもたちを「学校の外」に送り出そうとする学校の先生の存在。

第二には、子どもたちを自分たちの「ワクワク」に巻き込み、一緒にこれをつくっていくことのできる地域の大人の存在。つまり、先生たちが、「この人にこそ、子どもたちを会わせたい」と思ってしまうような、子どもたちが出会うに値する、地域のワクワクな大人の存在です。先生たちが、子どもたちを「学校の外」でワクワクさせたいと思っても、そこに、そうした大人たちがい



【図0-8】地域創造型教育実践コミュニティ



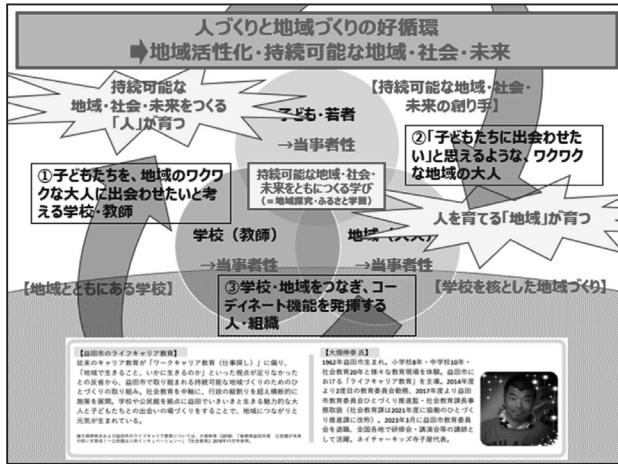
【図0-9】地域創造型教育実践コミュニティ創出の条件

なければ、話にならないということになるわけです。

第三には、そうした両者、学校と地域の間を繋ぎ、コーディネート機能を発揮する人や組織です。具体的には、何度も申し上げているような、CSだとか地域学校協働本部といった、学校と地域が連携・協働する仕掛け、仕組みをつくり、動かす「人」、「組織」が必要ということになります（【図0-9】）。

5. 益田市の「ライフキャリア教育」および大畑伸幸氏について

こうした課題意識を共有したいと、道東の地域教育をつくる会では、これまで5回のフォーラムを開催してきました。コロナ禍のため、第3回、第4回はオンライン開催ということもありました。第5回は本会場で対面開



【図 0-10】大畑伸幸氏

【図 0-11】スケジュール

催することができました。そして、第6回目が今年、本日ということになります。

今年は鳥根県益田市より、元・益田市教育委員会ひとづくり推進監・社会教育課長事務取扱、今年3月にご退職されて、今はネイチャーキッズ寺子屋という団体の代表を務めていらっしゃいます、大畑伸幸さんをお迎えし、同市の「ライフキャリア教育」に学ばせていただきます。

益田市のライフキャリア教育というのは、チラシにも書かせていただきました通り、社会教育を中軸として、学校と地域住民・行政をつなぎ、全市をあげて「ひとづくりを通じた地域づくり」に取り組むための、益田市独自の仕組み・取り組みです。そしてその立ち上げの当初から、これに一貫して関わり、つくり上げてきたのが、本日お迎えさせていただいた大畑さんということになるのかと思います。

先ほどの【図 0-9】に当てはめてみますと、よく分かると思うのですが、ご自身も、「子どもたちに出会わせたい」と思わせるような、地域のワクワクな大人として大活躍しながら、そうした大人たちを組織化すると同時に、学校の先生として、子どもたちを「学校の外」へと送り出して、そうした大人たちへとつなぎ、それを今度は、教育行政の職員として「ライフキャリア教育」という形で仕組み化される。まさに、その立ち上げから、①②③すべての立場を通して「益田市のライフキャリア教育」をつくり上げ、動かしてきたのが大畑さんということになるわけです（【図 0-10】）。

この方に、こういった課題意識でそういった活動を始

められて、それを仕組みとして形にするまでにはどういった経緯があって、そこにはどのようなご苦労があり、それをどのように乗り越えてきたのか、またこれまでのところどういった成果があって、どういったことが課題となっているのかといったところ、このようなところをぜひこの方にお話をうかがわせていただきたいという方です。我々としましては、この方にこそ、ぜひ道東地域のみなさんに出会っていただきたいかったという思いでお迎えさせていただきました。

そして実は大畑さん、今日午前中、また別のところで90分×2コマ分、みっちりご講義をされて、満足にお昼休みもとらず、今、この場に座っていただいております。大変お疲れ様のところなのですが、まことに申し訳ありません。本日はどうぞよろしく願いいたします。

6. スケジュール

最後に本日のスケジュールです。そういった形で、この後、さっそく大畑さんに1時間ほどお話をさせていただきました後に、本日はまたちょっと変わった形でワークショップ、意見交換の場を設けたいということです。

オープン・スペース・テクノロジーと言われることもあるようですが、そのやり方をちょっとアレンジしまして、お手元にA3用紙とマジックがあるかと思えます。大畑さんのお話をうかがいながら、ご自身が話し合ってみたいと思うテーマを一つ決めていただき、お話が終わった後に、それをその紙に書いていただき、それをみんなで見せ合って、仲間を募って、自由に意見交換をし



会場風景（ワークショップの様②）



会場風景（ワークショップの様③）

ていただくという、このフォーラムでも初めての試みになります。どうぞ、ご自由に仲間を募って、意見交換をしていただければと思います（【図 0-11】）。

お一人で考える時間をとっていただいても結構ですし、途中でグループを抜けて、他に話し合いを行っているグループに参加してみるといった具合でも大丈夫です。このワークショップに具体的な進め方を説明させていただき時間も入れて、1時間をとっています。

その後、16時から16時20分まで、また全体で集まって、話し合ったことや感想を共有する時間を取りまして、閉会のご挨拶を経て、16時30分頃に閉会というこ

とにしたいと考えております。

オンラインでご参加のみなさまには、大畑さんのご講演までしかご参加いただけないという、運営の都合上、大変申し訳ないことになってしまうのですが、こちらの会場にご参加いただいておりますみなさまには、3時間、あつという間の時間ということになることと思います。大畑さんのご講演をうかがって、意見交換を経て、その時に我々の目の前にどういった世界が広がっているのか、大変楽しみにしております。ワクワクしています。本日はどうぞよろしくお願いたします。

ひとが育つまち益田のひとづくりと地域づくり ～世代と繋ぐ、丁寧につなぐことから～

大畑伸幸

(元益田市教育委員会ひとづくり推進監・社会教育課長事務取扱、ネイチャーキッズ寺子屋代表)



大畑伸幸氏

1. はじめに

みなさんこんにちは。鳥根県益田市から昨日来ました。萩・石見空港という空港が益田市にあります。なんと市役所から車で10分、私の家からは5分。飛行機が降りてきたのが見えて、家から車で出たら乗れる。いいでしょう。1時間半で羽田に着いて、そこから1時間半で釧路に来ることができます。意外と近いなと思いつながら、寄らせてもらいました(【図1-1】)。

僕は教員をやっていましたし、社会教育行政もやっていました。社会教育でいろいろな自治体を回って、学社連携・融合とか、地域ぐるみで子どもを育てていこうということをやってきました。最後は学校に戻らずに、益田市で人づくり。社会教育行政で終わりました(【図1-2】)。

2. インフラとしての社会教育

(1) 大人の主体者意識をどう持たせるか

つながりとはどういうものか。社会教育は道路やトンネルや橋と同じようにインフラだと思って、僕たちはやってきました。

地域みんなで子どもたちを育てましようと言うけれど、僕は教員をやっていました。社会教育行政、市役所にいました。町の役場にいました。公務員で、給料をも

らってやっています。仕事です。お金をもらってやっています。

でも、地域教育は、地域の方たち、子どもたちも、みんなやろうやろうって言うけれど、誰も給料をもらっていない。もらっていない人たちが、なぜ我がことのように、子どもたちを育てるのに頑張らなあかんのか。一生懸命やるのか。いやいや、学校を守る先生方は高い給料もらっているやんか。役所にいるお前たちは仕事やろ。お前たちがやれやと言われがちになるのが、田舎の役場と住民の関係です。俺たち、なぜ子どもたちの育ちに関わらなきゃあかんのか。給料も出ないのによ。ここをまず考えなあかん。

僕自身、なぜそんなことに気付いたかという、こういう活動を通してです。21年間、ネイチャーキッズ寺子屋という活動をしています。ペットボトルでピザをつくるというアクティビティをしています。特許を取ったので、全国で展開をさせてもらって、仲間もいます。何が言いたいかというと、大畑さんは市民活動家だから。教育者だから。それで、今の子どもたちは野外体験が少ないから、子どもたちの野外体験を豊かにするために、ネイチャーズキッズ寺子屋を立ち上げて、親子で野外体験活動をやっているんだろうと。そんな風に思われるんじゃないでしょうか。

なぜ僕が市民活動、ボランティアをやっているかというと、僕自身、行政にいた期間が多いから、教員でもあるのに教え子が少ない。でも、キャンプでは私はボスで、子どもたちもボスボスって呼んでくれて。いろんなアクティビティがあります。キャンプしたり、いろいろな野外活動をしています。町中を歩いていたら、子どもたちが向こうからボスって声かけてくれて。よう、元気か。横でお母さんが、まあボス、いつもお世話になります、また今度キャンプにうかがいますからって言って。ああ、また来てくださって。その子にとって、そのお母さんにとって、僕は子どもたちに体験活動を提供して、楽しくしてくれて、子どもたちが喜んでくれる活動をつくってくれて。そういう人として見てくれて、ありがとうって言われるんです。子どもたちがボスっ



【図 1-1】「ひとが育つまち益田のひとづくりと地域づくり」



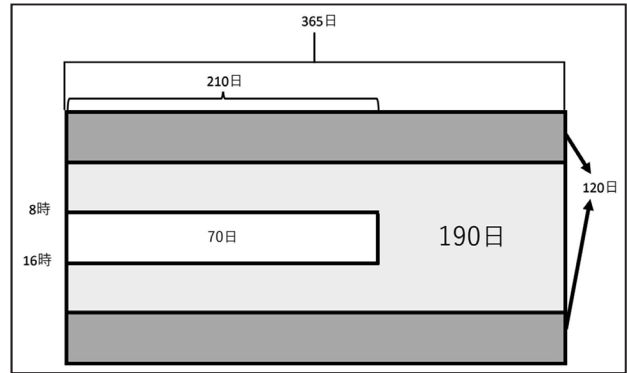
【図 1-2】自己紹介

て手を振ってくれる。僕は必要とされているんです。だから、僕はやれるんです。内発的動機といいます。

子どもたちとの出会い、子どもたちといろいろな活動をする中で、僕は子どもたちにとって必要とされる大人、意味ある他者としていたんだということを、僕自身が自覚するんです。これが、僕が市民活動をやっている原動力です。確かにお金なんか入りません。だけど、そんなふうに、ボス次もまた来るからねって言ってくれる子どもたちがいることが、僕の原動力です。

地域で、いろいろな人たちに一緒に子どもたちの育ちをやりましようと言った時に、なぜ自分がするんやという、主体意識を持てるように話をしているかどうか。いやいや、子どものためにお願いしますよ。分かった分かった。1回2回3回くらいは子どものために動くかもしれないけれど、4回5回となると、お前らは給料もらっているだろう、俺らは給料ももらわずに、なぜここまでせなあかんのかと言って、金属疲労を起こすのが、よくある学社連携・融合の姿。私たちが平成10年頃、やった時に起こった現象です。あ、そうなんだ。子どものためと言い過ぎたら、逆に金属疲労を起こして。お前らは仕事で金もらっているじゃないかという話が、次に来ました。

僕自身、自分でボランティア活動、市民活動を21年やってきました。今年は30回、子どもたちとアクティビティをやっていますけれど、なぜそんなことをするのか。金にもならんのに。楽しいからに決まっているんです。子どもたちからありがとうって言われるし。でしょう？やること自体が楽しいからやっている。そうですね？このところを、地域の方たちにきちんと提供できているのか。そういったところを、私たちはまず考えておかないと。道東の子どもたちに、将来道東に帰って来



【図 1-3】子どもたちの「190日」をどうするか

て、素晴らしい地域の人材になってもらうために頑張ろうなんて、なかなか力が入りません。最初はおーって言うけど、だんだんだんだん疲れてくる。主体者意識をどう持ってもらおうかということがとても大事だということが、まず1点。

（2）子どもたちの「190日」をどうするか

もう1点、この図を見てください（【図 1-3】）。横軸が1年365日、縦軸が24時間です。子どもたちが学校に行くのは、だいたい200日から210日です。子どもたちは朝8時から夕方16時くらいまでしか学校にいません。子どもたちが学校という空間で学校教育を受けるのは、おしなべていくと70日しかないんです。1日8時間寝るとすると、年間120日寝れます。70日しか学校教育を受けてない子どもたち。120日は寝ています。残りの190日は、学校ではない空間に子どもたちはいるんです。

でも、益田市でどうだったかということ、学校が頑張れ、親が頑張れと言われます。じゃあ190日、子どもを親が全部見るんですか。益田市の小学校の家庭の共働き率

は84%を超えました。ほとんどの親が働いているんです。190日の間、親はどうするんですか。学童もありますけれど。この190日のところ、子どもたちのために実は誰も責任を持って活動していない。ここを親まかせ、学校まかせにしないということ。地域のいろいろな人たちが、ここのところを、主体者として、俺たちは子どもたちと一緒に何か活動すると思ってくれたら、豊かになるじゃないですか。学校の70日より多いんです。でも、日本はこの190日に対してあまりアクションをかけていません。ここを豊かにするということが、子どもの育ちからすると、実はとても大事です。

今はここの所、そんなに力を入れていないじゃないですか。スポーツクラブまかせ、塾まかせ、習い事まかせ。そんなところばかりではないかもしれませんが、全部、指示命令を出して、子どもたちにやらせるというようなことばかりやっている。すみません、そんなところばかりではないかもしれませんが、でも、塾やスポーツクラブの多くは、ほとんど言われたことをやるようなことをしている。今日はこの練習を、こんなふうにするんだと指示命令されて、そのとおりに動くようなこと。学校と同じような、そういう与えられたことをやらせるというようなことをやっている。

さっき宮前先生が言われたみたいなの、ワクワクドキドキするような学びを子どもたち自身が見つけて、コーチ、今日はこんな練習を俺たちやりたいんですというようなことをするクラブは、少ないでしょう。自分たちがやりたいことを自分たちで作出して、おい、一緒にやろうぜって、ワクワクするようなアクティブなことを、どこで子どもたちはするのか。

僕たちが子どもの頃は、遊びというのは、仲間と一緒につくるものでした。野球をしようと思って、お寺の境内だったら狭い。じゃあ、ここに飛んでいったらアウトにしようとか、いや、小っちゃい子がおるけん、小っちゃい子は下から投げるようにしようとか、ルールをつくりながら、みんなで参加できるように折り合いつけながらやってきた。だから僕たちにとっては、スポーツは人から与えられるものじゃない。遊びも、自分たちで工夫してつくるものだった。

僕が剣道を大学までやってきて、一番良かったことは何か。中学・高校・大学と指導者が練習に来なかったこと。全部自分たちで考えて練習するしかない。どうしても勝ちたい、どうやったら勝てるだろうか。ずっとずっと考えて、仲間と一緒にやってきた。良かったと思って

います。もしすごい優秀な厳しい指導者がいて、一緒にやっていたら、今の僕はこんな発想はしないと思います。

良い指導者がおったら強くなれる。確かに強くなるけれど、考える力が奪われるかもしれない。190日、そんな指導者のもとで、学校と同じように一方的に与えられて、それだけやるような子どもたちをつくっているのかもしれないという危惧。教育委員会に合計14年間いましたので、僕は益田の子どもたちの育ちに対して、かなり責任を感じています。益田の社会教育で、子どもたちが地域でどんな活動ができていいのかという責任は僕にある。そう思って、振り返りながらつくってきました。その一端を、今日みなさんにお話しさせてもらおうと思っています。仕事でないことをその気にさせるというのは、社会教育ではなかなか高度なテクニックだと思います。

2. 益田市の地域づくりの課題と社会教育—インフラとしての社会教育で人をつなぎ、安心・幸せな地域・社会をつくる

(1) 益田市の地域づくりの課題一つながっていないから不安になる

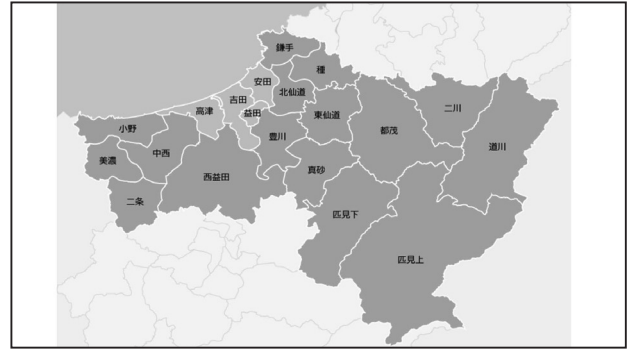
鳥根県益田市、こんな町です。今、人口は4万400人(【図1-4】)。地図の黄色いところ、真ん中の吉田、益田、高津というところが市街地です(【図1-5】)。安田は外れて緑色になりました。緑色の部分は中山間地域と言われるところです。人口で言うと、吉田が1万4000人、益田が6000人、高津が8000人。ここに人口の約6割から7割の人が集まっていて、残りはほとんどちょっとしかないというところ。右上の方にある道川と二川は200人を切っています。150人前後になってしまいました。

もともと、全部旧村。昔の村です。ですから、全部に小学校、中学校、公民館、郵便局、農協、全部ありました。でも、もう、道川や二川には郵便局はない、農協もない、小学校ももちろんない。中学校はあるわけない。あるのは公民館だけ。そういう地域もあるし、一方で、ニトリがあつたり、マックがあつたり、セブンイレブンがあつたり、すき屋で朝ご飯も食べられたりという、地方都市の典型的な町のようなところもあつたりする。

多様な地域があつて、多様な暮らしがあつて、その中



【図1-4】島根県益田市①



【図1-5】島根県益田市②

で、この地域が将来にわたって持続可能となり、人がなるだけ元気で、幸せだよと言える地域になっていくことが、益田にとって一番大きな課題。

しかしながら。今、中学校3年生は450人くらいいます。人口4万4000人の中の450人くらい。大体100人に1人です。小学生は360人になりました。コロナで結婚控え、それから出産控えをされた方が多くて、とうとう昨年、300人を切ってしまいました。間違いなく少子化が進んでいます。数年前に若者が作ってくれたデータですが、人口も4万6000人が4万5000人を切ってしまいました。減っています。いや大変。でも日本国中、どの自治体でも、全部人口は減っています。東京都も減り始めました。川崎だけちょっと伸びていますけれど、でもその川崎も、もう数年したら減りはじめます。人口が増えることはないです。

だけど、その中で幸せで元気な地域をつくらなにかいけんとなると…。さっき言ったような、町の中で、役所頼みの、おい市役所、何とかしてくれというような人たちばかりだったら、行政はもたないです。行政は今、人減らしにあっています。人がいなくなり、予算も減っていく中で、住民の方から、何とかしてくれ、何とかしてくれという声が上がれば、行政はもたないです。全国各地で、まちづくりをする団体をつくってくださいということを、各自治体、コミュニティ単位でやっています。なぜか、行政がもたないから。

社会関係資本、ソーシャルキャピタルといいます。人がつながっているかどうかということ。ソーシャルキャ

ピタルが豊かであればあるほど、つまり人がたくさんつながっている地域であればあるほど、犯罪が少ない、子どもの学力が高い。そして、行政コストが低い。これはもう、エビデンスが出ているそうです。人がつながっていたら良いですよ。

だけど今、現状はというと、おい学校、頑張れ頑張れと言って、子どもたちの育ちにさえ、コミットしない人たちがたくさんいる。益田では自治会と呼びますけれど、自治会でやっている掃除なんかでも、いや仕事があるのでと言って、実は買い物に行っているおじさんやお兄さんたちが出てくる始末です。そんなふうには、selfishに自分のことを最優先してしまう。みんなとともに社会をつくる。より良い社会をつくるために学校はあるんだと、先ほど先生のお話の中にもありましたけれど、より良い社会をつくるということの実践をしている人たちの数は、どんどん減っています。めんどろなことをやめてしまえと、人と人のつながりを切って、selfishになっている孤立した無縁の方が増えているんです。そうするとどうなるか。人とつながっていないから、不安になるんです。

（2）インフラとしての社会教育で人をつなぎ、安心・幸せな地域・社会をつくる

東京大学の牧野篤先生⁽¹⁾と話をしている時に、大畑君、自立、自ら立つということをどう考えているかと問われました。みなさん、どうですか。自立。僕は当然、自己

⁽¹⁾ 東京大学大学院教育学研究科教授、博士（教育学）。専門は中国近代教育思想、社会教育・生涯学習（<https://researchmap.jp/makino/>（2024年1月7日確認））。益田市における社会教育・生涯学習をめぐる著述に「ひとが育つまち、ひとが育てるまち—到来し続けることが常態の『まち』へ」『都市問題』第114巻第4号（2023年4月号）、公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所、2023年など。



【図 1-6】 益田市における人口流出の動向

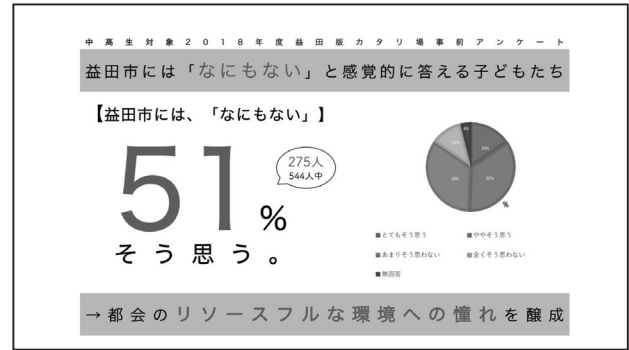
責任で、自分でできることを精一杯やって、人に迷惑をかけないことかなと答えたら、僕は違うんだけどな、と。じゃ、どんなものなのかと思ったら、自分が困った時に倒れそうになる。それを誰かが支えてくれる。誰かとながらることによって、助けてもらえる。誰か倒れそうだったら、ちょっと手を差し伸べたり、声をかけたり。お互いにたくさんつながっていたら、安心してそこに立てるじゃないか。たくさんつながればつながるほど、安心してそこに立っていられる。これが僕は自立だと思う、と。

なるほどそうなのかと、僕は納得しました。それが社会のインフラである社会教育が人をつなぐということの本質であり、そうすることで、みんなの不安を取り除いて、幸せになる社会をつくっていくことができると思いました。そういった問題と、担い手がいない、後継者がいないという地方の一番の問題を一緒に考えていくことはできないかということが、益田の「ひとづくり」という言葉にこめられた政策上の根本的な課題意識なのではないかと思っています。

3. 益田の子どもたちをめぐる課題

(1) 益田には「何もない」

子どもたちに聞きました。平成 27 年、消滅可能性都市ということが言われるようになりました。将来あなたの都市は人がいなくなりますよということです。子どもを産み、育てる女性がいなくなりますよと宣告された町。東京でも、豊島区。豊島区が消滅可能性都市というふうに言われました。だから、豊島区は、今ではアートによる町づくりとかやっています。あれは、豊島区が消滅可能性都市と呼ばれるようになって、びっくりしたん



【図 1-7】 益田市には、「なにもない」

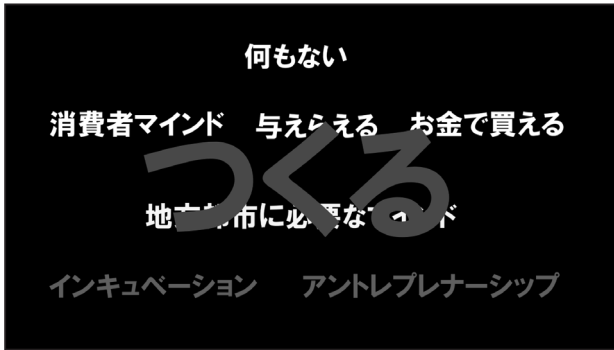
です。益田市も間違いなく、もれなく消滅可能性都市に入っています。調べてみると、僕たちが思っている以上に、実は衝撃的なことがよく分かりました。

益田は大学がありませんから、高校を卒業すると、9割の若者たちが町を出て行きます。大学に行ったり、短大に行ったり、専門学校に行ったり、就職したり。大学卒業時に彼らがどうするか、調べてみると、3割しか帰って来ないことが分かりました。そりゃ減りますよね。3割しか帰って来ない。でしょう？（【図 1-6】）

でも、島根県は全県でふるさと教育をやっています。小学校、中学校で年間 35 時間のふるさと教育を教育課程に位置付けるという、日本にどこにもないようなことをやっています。なので、大体 9 割くらいの子が、島根県、ふるさとが好きと答えます。好きですと言います。でも、帰ってくるのは 3 割です。帰って来ようと思っていません。なぜだろう。いや、ここですよ。分からなかったらどうする。子どもたちに聞けば良いと思いました。

なぜ帰って来ないのか。子どもたちに聞いてみました。益田ってどんな町と聞いてみたら、何もない町と言われました。隣に浜田市という、人口 5 万人の石見地方で一番大きい、大きいといっても 5 万人ですが一町があります。ここでも同じ時期に高校生に聞くと、同じ 51%の子が、浜田市は何もない町だと答えました。道東の子どもたちはいかがでしょうか。同じ地方都市として、子どもたちはどう思っているでしょう。

今の中学生—不登校の中学生に関わっているのですが、見ているのはインスタか TikTok ですよね。インスタでかわいい制服を着て、スタバの新発売のラテを飲んでいる子どもたちの写真を見るわけじゃないですか。そして、ああ、益田にはスタバがないって、子どもたちは言うんですよ。今、この低成長の時代、いろいろな、

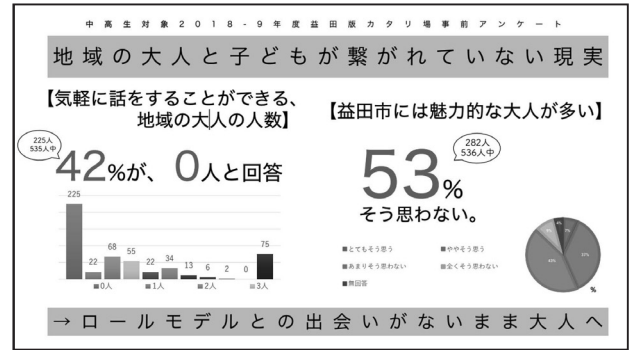


【図 1-8】地方都市に必要なマインド

多様な価値観があるでしょう。それを認めましょうとみんなで言っている時代。そんな時代なのに、子どもたちは、お金があって、お金で買えるものがあればそれが豊かさだと思っている。

僕は 1962 年生まれ。高度成長期に学校を過ごしました。たくさん子どもたちがいる中で勉強を詰め込まれて、良い大学に行って、良い就職をして、お金をいっぱいもらったら幸せと言われて大人になりました。けれども、大学を出た瞬間にバブルが崩壊して、どんどんどんどん下火になって行く。そういう経験をした僕からすると、それは違うんじゃないかと思う。けれども、やっぱりお金がたくさんあった方良いという価値観が、社会意識としてまだ子どもたちにあるから、子どもたちもリソースフルな金で買えるものがある方が良いと思っているのかなと、僕たちは分析しました（【図 1-7】）。

だったら、田舎の地方都市の益田市の子どもたちに、どんな力があつたらいいのか。やっぱり、自らつくっていくこと。先ほど先生がおっしゃったみたいに、子どもたちが、仲間とともに、または異質な他者と一緒に、何かワクワクすることをつくっていくということ。そんなことは、田舎だったらいとも簡単にできるのに、そんなことすら子どもたちはしていなかった。そういう、みんなと誰かと一緒になってつくるということを、もっともっと子どもたちにやらせない。何もない？ いやいや、何でもつくれる町なんだという経験をさせないと。そうしないと、子どもたちはお金という価値観だけのものさしを持って都会に行って、苦しむことになるのだらうと、僕たちは考えました（【図 1-8】）。



【図 1-9】地域の大人と子供がつながっていない現実

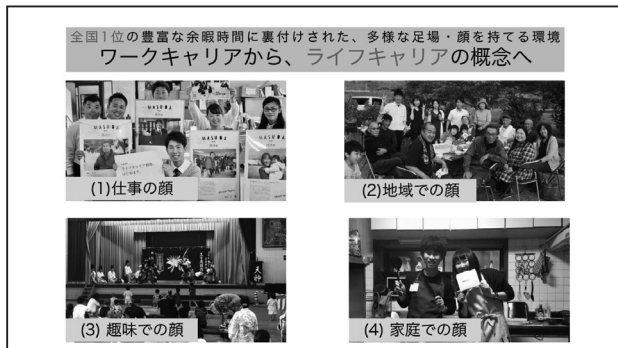
（2）子どもと大人がつながっていない

次がまた、子どもたちに聞いて衝撃的だったことです。益田市では平成 11 年から学社連携・融合ということをやってきました。だから、学校に地域の方が入って来るなんて当たり前です。山田真子さん⁽²⁾が益田に来てくれました。豊川小学校にも視察に行きましたが、その時も学校にアポなんて取りませんからね。突然学校に行って、来たよと言って入って行って、あ、どうぞどうぞ、と。アポなしでスタスタ連れて行って。子どもたちに、ようって声かけたら、こんにちはと言ってきて。そこのコミュニティ・スペースで、みんなで視察対応をするということを平気でやるんです。どの学校でも入口で名前を書いてくれと言われてますが、書いたことなんかないです。ようって声かけて、いきなり入ります。

そんな益田ですけれども、気軽にしゃべれる大人はいますかと、子どもたちに聞きました。僕たちは学社連携・融合をやって、地域で子どもたちを育てる活動もやってきた。町中で中高生が挨拶もしてくれる。自信满满でこのアンケートの結果を見た。その瞬間、ショックでしたね。気軽にしゃべれる大人がいない、ゼロと答えた子どもが 42% ですよ。大人たちの片思いだったんですよ。ボスと言われて自信满满的な僕。魅力的な大人はいますかと子どもたちに聞いてみて、いると答えた子どもたちが 5 割しかいないという結果。ショックでした。自分はこちら側かなと思ったりもしましたけれど、でも、そういう結果だったんです【図 1-9】）。

学社連携・融合と言いながら、学校の中にも地域の方

⁽²⁾ 北海道教育大学釧路校地域文化研究室 3 年生（2023 年度現在）。2022 年夏に益田市を拠点に「居場所づくり」「ひとづくり」を行う一般社団法人「豊かな暮らしラボラトリー」（通称「ユタラボ」）で様々な活動に参加（<https://yutalab.com/>）。

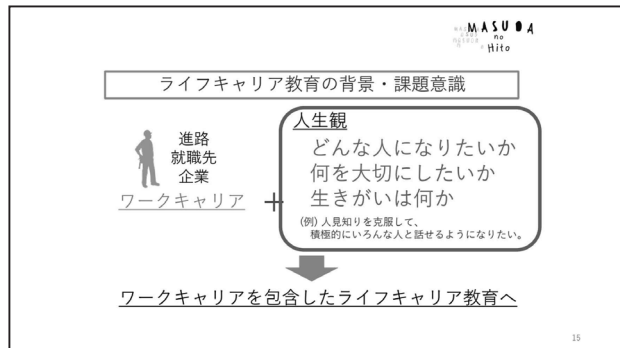


【図1-10】ワークキャリアからライフキャリアへ

たちがいっぱい入って、公民館でも地域の活動をいっぱいやって。やってはいたのだけれど、子どもたちからは、あなたたちとはつながっていませんよ、気軽にしゃべれる相手じゃありませんよと言われました。ショックでした。益田も、地域づくりも、企業も伝統芸能も、お祭りも、後継者がおらずに全部困っている。でも、子どもたちに聞くと、あなたたちとつながっていませんよ。だから、あなたたちが何をやっているのか知りませんよと言うんです。

学校でもっと地元企業のことを取り上げてくれたら、子どもたちも地元企業に入るんじゃないか。そんなことあるわけじゃないですか。小さい頃から何も子どもたちに関わっていない大人たちが、卒業・就職間近になって、自分たちのことを見てくれ、地域のことをやってくれと言うのだけれど、何もないと思って出て行った子が、何もないところに帰って来てくれると思いますか。何もないところだから俺が頑張って何かやろうなんて、思うわけじゃないでしょう。何もないところに仕方なく帰って来る。そんな仕方なく帰って来る子たちが、地域の行事があるから、今度草刈りがあるから一緒にやろうぜって言っても、いやちょっと仕事があるからと言って、参加しないのは、自明なことじゃないですか。

小さい頃から地域の人たちと一緒にいろいろやって、ああ、おもしろいな、おじちゃんたちもこうやって地域を守ってくれているんだ。大変そうだけれど、やった後、打ち上げをして楽しくなるんだ、おもしろいんだなど。地域活動をすることで、いろいろな人とつながったり、いろいろなおじさんたちの話を聞いたり、いろいろな技術を学んだり、いろいろな経験をすることで、いろいろできるんだという経験。そんな経験もさせず、ここには何もないと思わせて出て行かせる。そんな地域に仕方な



【図1-11】ライフキャリア教育の背景・課題意識

く帰って来る子どもたちに、お前ら頑張れって言っても、頑張るわけじゃないじゃないですか。人はやったことしかできません。でしょう。教えたことしか分からないんです。繰り返しやらないと身につかない。なのに、そういったこともさせずに、いきなり地域で地域の活動をしなさいと言われても、するわけではない。

子どもたちに関わりなさいと言われて、なぜ俺たちが？学校が関われば良いじゃないかとしか思っていなかった人たちが帰って来ているんじゃないだろうか、僕たちは思ったんです。ショックでした。学社連携・融合、すなわち地域ぐるみで子どもを育てるということをして5年間ずっとやって来て、自信满满だった大畑は愕然としました。ああ、つながっていなかったんだ。だったらつなげないといけないなと思いました。それで、考えました。

4. ワークキャリアからライフキャリア教育へ

人生って、1日、1週間、1ヶ月、1年といった単位で見ると、仕事以外の時間がたくさんあるじゃないですか。さっき見た通りですね。子どもたちは、年間70日しか学校に行っていない。そう考えたら、私も仕事には行っているけれど、仕事だけで一生を過ごしているわけではない。僕は3月31日をもって公務員生活が終わりましたので、今はセカンドステージ。若者たちとNPOでたくさん活動をしています。他にもまだ名前を言えないNPOと一緒に活動をしたりしています。ネイチャーキッズ寺子屋で市民活動もやっていますし、地域の自治会の副会長として盆踊りの世話をしたり、いろいろな活動をしています。いろいろな活動をしてきているのに、仕事しか焦点を当てず、キャリア教育といえば、子ども

たちには、お前たち、将来はどういう仕事に就くんだということしか聞いてこなかった。これは、僕たちは子どもたちをミスリードしたと反省しました（【図 1-10】）。

だから、キャリア教育という言葉には、どう生きるかという問題も課題提起としては含まれるのだけれども、あまりにも仕事をどうするかということばかりを言い過ぎてきたので、新しくライフキャリア教育という言葉をつくって、いかに生きるかということ子どもたちと一緒に考えることにした。でも、学校の先生たちが、学校で子どもたちにいかに生きるかということを教えられるかという、学校の先生は、学校の先生という生き方のモデルしか、子どもたちには提示できない。親もそう。だから、つながっていない、地域で生き生きとして頑張っているいろいろな活動をしているおじいちゃん、おばあちゃん、兄ちゃん、姉ちゃんたち。そういう人たちがロールモデルとして子どもたちと出会って、仲良くなって、一緒に地域の活動をし、いろいろな経験を積む。そのことによって、子どもたちが、ああ、いろんな人がいて、いろんな生き方があるんだということを感じ取る（【図 1-11】）。

9割の子どもたちは、益田を出て行くかもしれない。でも、そうやって、子どもたちと地域の大人たちが一緒になって活動をつくるという経験をすれば、帰って来る時には、ああ、帰って来た。あのおいちゃんとまた今度、あの活動をやりたいなと思って、その活動をしようと思うかもしれないと、僕たちは考えました。

子どもたちが地域の大人たちとつながっていない。そういった状況の中で、悪い循環を良い循環、好循環に変えるためには、まず、子どもたちをロールモデルにちゃんと出会わせて、仲良くなって、そして一緒に活動する機会をたくさんたくさん学校の外でつくっていくしかない。学校は、標準時間数 1000 時間をこなしなさいと言われてます。部活もあります。さっきお話ししました。190 日間、これだけあるんです。そこでやった方が良いに決まっています。学校の先生に、今度の日曜日に子どもたちとこんなことやるんですって、許可を得る必要はない。学校の教育活動じゃないんだから。

でも、地域の中には、お祭りがあるのですみません、学校の校舎貸してもらえませんか。日曜日なのだけれど、すみません。子どもたちに何か手伝ってもらえませんかと言って、学校長にお願いに行くという地域もたくさんあります。日曜日は学校の管理外ですよ。なのに、そうやって学校頼みをしている地域のおじさんたちがま

だまだいます。ふだんからつながって、おいこら祭やるから、お前来て言ったら、来るじゃないですか。そういうことが、つながっていないからできない。だから学校頼みになって、仕方ない、じゃあ吹奏楽部と行って、演奏でもしてくれと。吹奏楽の先生に、ごめんな先生とお願いして、行っているのが学校の実態です。そうではないようにしないといけない。そういうことを僕たちは考えました。

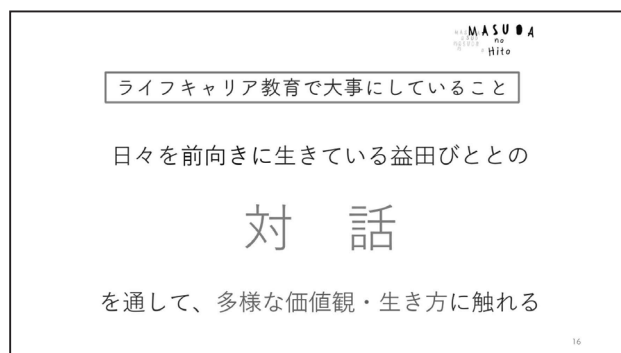
5. ライフキャリア教育の具体的な取り組み—公民館を拠点に「対話」で人をつなぐ益田版「カタリ場」

（1）人をつなぐ「対話」の重要性

益田はひとづくりを標榜しました。行政や役所の中で、ひとづくりは大事と市長さんや偉い人は言うけれど、ひとづくりを市の施策の中の真ん中に据えている町なんかありません。人が育つということがどういうことなのかと聞かれたら、難しいじゃないですか。具体的にどうしたら人が育つのか、ひとづくりになるのか、難しいから。益田はひとづくりをやると市長さんがおっしゃったので、僕たちも考えました。ひとづくりは大事だと思う。でも、これを本当に政策として益田全体でやるにはどうしたらいいか、いろいろ考えました。

人が育つ。どこで人が育つのかと考えた時に、僕たちがみんなで考えたことは、人は人の中で人となる。すなわち、人との関係性の中でしか人は育たないんだということでした。このことを、私たちはまず中心におきました。人とつながっていなかったら、人は成長しない。ロールモデルになるべき大人が学校の先生と親しかいなかったら、それは多様な生き方を学べないから、無理です。だから、子どもたちを多様な大人とつなぐということをやりたいと思いました。まずは人とつなぐことを丁寧にやっていかないと、子どもたちは人と一緒に活動することすらできない。このことが、僕たちの考えたひとづくりのスタートでした。

じゃあ、人と人が仲良くなるにはどうしたらいいか。まあ、会わせておけばええんじゃないかとも言うけれど、ただ会わせても仲良くなりません。ボランティアの学会に参加した時の話ですけれど、大学生でボランティアをやっている NPO の方が、入口が大変なんですと言われていました。ただ会っただけ、ただ話っただけ、それだけでは、なかなか人は仲良くなりません。2度



【図 1-12】ライフキャリア教育で大事にしていること

目のボランティア参加ということにはなかなかならないんですと、悩んでおられました。

その時、今村久美⁽³⁾さん、岩本悠⁽⁴⁾さんといった、いろいろな若者、素敵な若者たちと一緒に考えたのが、対話だということ。性別とか年齢関係なしに、対等な立場で語り合う対話をきちんとすれば、人はつながるのではないだろうか。それが彼らの言い分でした。本当かなと思ってやってみたら、本当にそうだったんです。対話。

益田は、この対話をスキルだと考えました。たかが中学生の話を生懸命聞いて、あんなもん違うわ、人生そんなに甘くないと、大人は言いたくなるかもしれない。けれど、スキルだと割り切ってください、と。相手が話したら、笑顔でうなずきましょう。心はどうでもいいです。この若造がと思ってもいいですから。うなずいてください。できれば、はひふへほと言ってください。簡単な言葉で、へーとか、はーとか、言えば良いんです。そしたら、何か喜んでくれていると思うじゃないですか。

そして、もう一つ大切なことは、質問をするということ。僕、サッカーが好きなんです。へーで終わらずに、えっ、いつから好きなの、なんで好きになったのって聞くと、子どもたちは、ええとね、小学校1年の時に友達

のお兄さんがサッカーがすごくうまくて、お兄さんはサッカーもうまかったけれど、僕たちともすごい遊んでくれて、すごいかっこよかったんですね。あのお兄さんみたいになりたかったのかな、とかいうように、サッカーが好きという言葉から、本当の自分自身の憧れの存在のことを思い出したりすることがあるんですね。

そうすると、あ、あのお兄さんみたいになりたいんだ。サッカーも好きだけれど、あのお兄さんみたいになりたいからサッカーをはじめたんだって思い出してくる。すると、そういったことを思い返させてくれた、質問してくれた相手の人をどう思いますか。私の心を深く理解しようとしてくれた人だと思うじゃないですか。となると、何か知らん、親しみを感じる。そういったことを、大人と子ども、お互いに入れ替わりでやっていくと、何か知らん、終わった時には元気になってくる。そして、その方と何か親しみを感じるということになっている（【図 1-12】）。

（2）公民館を拠点に「対話」で人をつなぐ益田版「カタリ場」

益田では、そういった「カタリ場」⁽⁵⁾ということをやっています。その後、そのカタリ場に参加した子どもたちと地域の大人たちとで、今度は公民館で直会をする。直会というのは、反省会みたいことをするんです。もちろん、お茶やコーヒーを飲みながら。時にはバーベキューをしながら。そうすると、そういったことをやりながら、1回カタリ場で仲良くなっていますから、また会うと盛り上がる。盛り上がってくると、公民館の人たちが、何かやりたいね、良いね良いねって、火に油を注ぐんです。そうすると、良いね、これやりたい、これ。良いね良いね、良いね良いねというふうになっていく。これ、すぐできるね、あそこのおじさんがすごくまいよ、呼んで

⁽³⁾ 認定特定非営利活動法人「カタリバ」創業者、代表理事。ハタチ基金代表理事、地域・教育魅力化プラットフォーム理事（<https://www.katariba.or.jp/outline/member/13693/>（2024年1月7日確認））。文部科学省中央教育審議会委員、同教育振興基本計画部会（第11期～）委員等。

⁽⁴⁾ 地域・教育魅力化プラットフォーム共同代表。著書に『流学日記』（文芸社、2003年）、共著に『未来を変えた島の学校—隠岐島前発ふるさと再興への挑戦』（岩波書店、2015年）。文部科学省中央教育審議会教育振興基本計画部会（第11期～）等。

⁽⁵⁾ 認定特定非営利活動法人「カタリバ」が開発した、主として高校生を対象としたキャリア教育のための出張出前授業のプログラム。「総合的な学習（探究）の時間」等に行われ、「ナナメの関係」にある大学生との対話により高校生の心に灯をともし、自己のキャリア等について自分事として考える契機とすることを目的としている（上阪徹『「カタリバ」という授業—社会起業家と学生が生み出す“つながりづくり”の場としくみ』（2010年、英知出版）。上阪（2010）ではプログラムを実施する団体・組織を「カタリバ」、実施するプログラムを「カタリ場」と表記しており、本稿でもこれに従う。



【図 1-13】「カタリ場」の様相



【図 1-14】益田版カタリ場

来ようかと言って、どんどんどんどん人をつなげていって、結果的に、そこでやりたいねと言っていたことが、すぐに実現できるようになっていくということを繰り返して繰り返してやりました。

対話という手法を使うことで仲良くなれます。だから、出会いの機会を設けて、対話で仲良くさせておいて、その後、もう 1 回、対話の機会を学校外で設けて行く。益田の場合は、それを公民館でやり続けたんです。このカタリ場を、益田ではどんな雰囲気で行っているのか。ちょっとご覧いただこうと思います。

小学生は、高校 3 年生と。中学生は、地域の大人と。高校生も地域の大人とだけれど、今は企業の若い新人が、新人研修として今は参加しています。市役所の新人は年間 4 回以上、カタリ場に参加することが必須になっていますので、人事課の方で、そのようにしてくれています。じゃあちょっと、カタリ場の様子をご覧ください（【図 1-13】）。

【動画】ライフキャリア教育、はじめます。子どもと大人の心に「火」を灯す授業。益田版「カタリ場」。

大人：がんばるぞ。おー。

字幕：地域の大人×中・高生

益田びとの「本音」を知る。

益田びとの「生き様」に触れる。

大人との対話を通して、「どんな人になりたいか」を考える。

その想いは、高校生受け継がれて

高校生×小学生

高校を卒業する 3 年生が語る

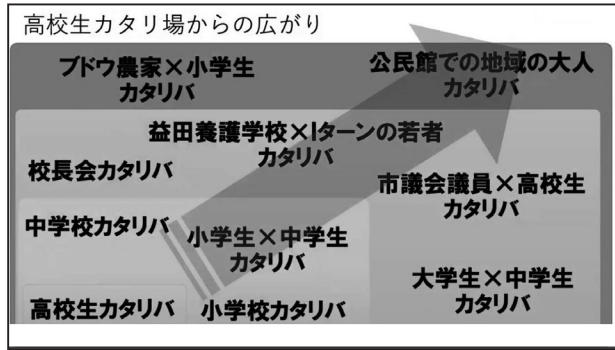
益田での 18 年間のドラマ

小学生も自分のことを語る

カタリ場をうけた小学生が中学生となり
 カタリ場をしてくれた高校生への憧れを胸に
 中学生×小学生
 自ら「やりたい！」と手を挙げた中学生たち
 緊張と不安を乗り越えて、受け継がれる「憧れの輪」、
 子どもの語る姿が大人を動かす
 地域の大人×地域の大人
 世代の壁を超えて
 語り合う、自分の「想い」。
 地域と子どもの繋がりが薄くなりつつある時代だからこそ、
 世代を超えて、「本音」の対話を
 小学校で高校生と語り
 中学校で地域の大人と語り
 高校で働く大人と語り
 高校卒業前に、小学生に語る
 益田版カタリ場
 主催：島根県益田市教育委員会（【図 1-14】）

こんな感じでやっています。大畑は行政にいたから、トップダウンで一斉にやったんだろうと考える人もいるかもしれませんが、いえ、やっていないんです。僕は先生にワクワクしてほしいし、主体的にやってほしいので、強制はしませんでした。地域の大人とつながるこんな素敵な対話のプログラムがあるんですけど、やりませんか？やりたいところはサポートしますよと言って、やりました。

いきなりやったのは益田高校。平成 28 年 3 月でした。それを見ていた中学校の先生もやりたいと言ったので、じゃあ中学生は地域の大人とやりましょうということでやって、それを見ていた小学校の先生もやりたいと言った。小学生と大人はちょっと年齢が違い過ぎるから、高



【図 1-15】益田版カタリ場の広がり

校3年生の卒業生が良いんじゃないかというアイデアが出てきて、やりました。どんどんどんどん広がって、今では、ぶどう農家が小学生にカタリ場をやっています。もう高校生になって農業を知っても遅いとか言って、カタリ場やっています。やりたいということを、学校の先生方にも持ってもらいたいなと思って、やっています（【図 1-15】）。

僕たちは逆に、なぜこの学年のこの時期にやるんですかということを、学校に問うています。ですから、強制じゃないんです。やりたいということを大事にしています。結果的に、全部やっています。でも、大事なことは、子どもと大人が繋がってないので、カタリ場をした後に、活動をするための出会いの場を、再度、地域の中で必ずつくるということを公民館でやっています。

和歌山県の方と一緒に、和歌山県でやった時のことです。学校で2回ほど、ただただ対話をするという時間を1時間ずつ設けました。県の方では3回目には地域活動をつくらうと考えていたけれど、今度は公民館に行って話したいということになって、地域の大人と子どもたちが、休みの日に公民館で話すことになったということでした。もっともっと話したいと思っている子どもたちはたくさんいる。だから学校に閉じずに、学校の外に出した方が、子どもたちはもっと生き生きするんだということがよく分かってきたなと思っています（【図 1-16】）。

成人式の時に、毎年聞いています。将来益田に住みたいと思う子は、だいたい50%くらいでした（2018年）。3割が帰って来てくれていました。今年の1月（2023年）、20歳の人に聞きました。将来、益田に住みたい人は何人いますかと聞いたら、83%が将来、益田に住みたいと答えました。「益田市には魅力的な大人が多い」と答え



【図 1-16】カタリ場からの活動の広がり

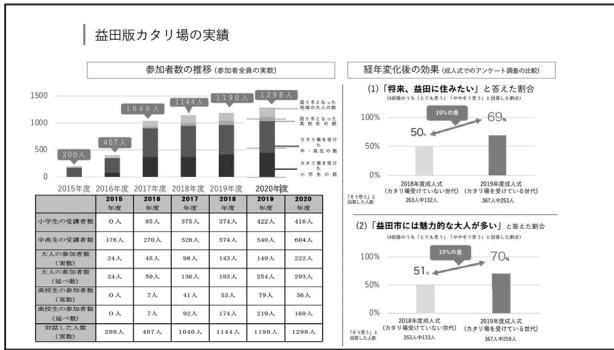
た人たちは51%だったのに、カタリ場を通して具体的に人と出会って、活動する人が増えてくると、90%になりました。つながっていなかったけれど、丁寧につなげて活動と一緒にやって、具体的につながったら、子どもたちの意識がこんなに変わったということが分かりました（【図 1-17】）。

6. 学校教育の限界と社会教育の役割—子どもを真ん中に、人をつなぐ

(1) 学校教育の限界

学校教育と社会教育は、なかなか相入れないところがあったりするかもしれませんが。学校が目指すのは効率化であり、強制する場です。あなたはここに住んでいるから、この学校に行きなさいと、強制的に定められて、同じ年の者が集められて、効率的に教えるべきことを教えるというのが学校です。効率化です。教室を見てください。真四角で、机も全員前に向いて、一斉に授業をするためにつくられた仕組みでしかないです。でも社会教育というのは、一見無駄に見えたり、余白であったり、義理と人情で人が集まったり、憧れによって人が活動を始めたり、そういうことが社会教育の本質的な成り立ちだろうと思っています。

だから、学校はPDCAというサイクルを回しやすいですよ。効率的でなければならぬわけですから。計画を立てて、アクション起こして、振り返って、また改善するという作業。社会教育は人がやることですから、1年前に計画を立てたら、1年後にはもう意欲はなくなっています。やりたいと思ったら、すぐにやるというような形。ですから、一見、何をやっているんだ、お前



【図 1-17】 益田版カタリ場の実績

学校教育	効率化	強制
学びの主体者 より良き社会を作る市民		自主性 自発性 無償性 無給性 社会性 連帯性
ボランティア		先駆性 創造性 開拓性
安心して自立できる地域 より良き社会を作る市民		憧れ 主体性 義理と人情
社会教育	無駄 余白	

【図 1-18】 学校教育と社会教育、ボランティア

たちは、と思われるような活動が多い。

地域の方たちが、PDCA を回す学校に、これやりましょ、あれやりましょと言った時に、いやあ、もうやる事が決まっているので、まあ来年やりましょ、なんてことになってしまうのは、それは仕方ないですね。人の営みというのは、基本的に1年前に計画してやるようなものじゃないです。おもしろい、やろうぜやろうぜ、でしょう。キャンプやりたい、じゃ、やろうぜというのが、人の営みだと僕は思います。社会教育というのは、そちら側の方と親和性が強い。だから、学校教育と社会教育は、なかなか難しいところがあるんだろうと思っています。

学校教育は、学ぶ力、自ら学ぼうとする力、学びへの主体性をもった人たちを育てなさい、そして、より良い社会をつくる市民をつくりましょと言われていたけれど、それ、できるんですかという話です。コロナ禍で、小学校には英語が入り、ICT も使いなさいとか、いろいろなことが学校には課されてきています。僕が教員になった頃は、たとえばクラスの中で起こったちょっとしたトラブルについて、みんなでどうするか、学級会で2時間でも3時間でも話し合うというようなことを、時間をつくりながらしてきました。

体育祭の前には、みんなで練習する時間をたくさん取っていました。しかしながらコロナのおかげで、学校を閉めても大丈夫だと先生方も分かっちゃいました。なので、益田市では、すべての中学校の体育祭は平日半日になりました。苦勞して苦勞して応援合戦の練習をしたり、けんかも起こるけれど、最後は感動的に終わったというようなこと。それこそ正解はないけれど、折り合いをつけながらみんなで何かをつくりあげていくというような、本来社会をつくっていく上で、みんなが当たり

前にやっていることの経験が、学校の中では、もう、できにくくなっています。僕が教員になった頃は、もうそんなことばかりやっていました。でも、今そんなことをやっていたら、終わらないですよ。

(2) 社会教育の役割—子どもを真ん中に、人をつなぐ

だから、社会教育。先ほどお話ししましたような、安心して自立できる地域社会。人がたくさんつながっている社会をつくるのが、社会教育の目的と思っています。学校にも学びの主体者、より良い社会をつくる市民をつくるということを課しているけれど、学校教育を見た時に、それは学校では今はなかなか難しくなっているというのが僕の見立てです (【図 1-18】)。

そこのところを、社会教育でしっかりやっていきましょう。そうせんと、おいちゃん、あんた、わたしの後継者はどうする。この子らにその気になってもらわなかったら、将来帰って来もしないし、帰って来ても地域活動もしないような地域住民になっても良いのか。いやいや困る。じゃったら今、子どもたちと一緒にあって、喜々として子どもたちといろいろな活動をやったら、子どもらも、やったことのある活動なら、帰って来てもやってくれるかもしれん。そうじゃのう。でしょう？

将来、後継者を危惧するのであれば、未来の担い手である子どもたちに、今、あなたたちが一生懸命やっていることを、楽しそうに、一生懸命子どもたちとやれば良いじゃないですか。と言うと、そうよのう。子どもが帰って来なかったら困るし、帰って来ても、何もしないような子は困るし。それならやろうと言って。

未来の担い手を育てることになるんですよ。親まかせにしても、親も地域行事に出ないようになっているの

に、無理じゃろうねと言ったら、そうよのう、と。学校の先生は、ここの住民ではないですよ。そうじゃのう。この地域でみんなが幸せになりたかったら、おいちゃんやおばちゃんらが頑張って、今の子どもたちといろんなことを一緒になってやっていかにゃあ。お父さんお母さんでは、子どもたちの190日はまかなえませんよ。そうよのう。

でも、子どもはそんなに暇なのかと言うんですね。でも、実際、暇ですからね、子どもたちは。僕より忙しい中学生を見たことはありません。ですよ。何をもち忙しいというのか、僕は理解できない。と言うと、おじちゃんたち、おばちゃんたちが、そうよのう、将来帰って来てもらいたいし、帰って来いとは強くは言えませんが、でも帰って来た時に、一緒になってやろうというような関係をつくったかには悪いのう。帰って来てても話もできない関係だったら悪いのうと言って、活動するんです。

そうするとどうなるかという、子どもと一緒にやるとなると、人がどんどん集まって来るんです。日本は、子宝の文化です。子どものためと言って。集まるんです。子どもをちゃんと手間扱ひせず、一生懸命やっている、子どもたち、けっこうやるんです。おお、子どもらやるもんじゃのうという具合に一緒にやっていると、子どもに負けられて、おいちゃん、おばちゃんたちも元気になってくる。わしは引退かと思うたが、この子が帰ってくるまで頑張るでって、じいちゃんも言い出してしまいます。

すなわち、子どもは人をつなげる接着剤。人を元気にする触媒なんですよ。そう考えていくと、子どもたちを真ん中に据えた、人をつなげるということを丁寧にやればやるほど、子どもも成長するし、今まで活動しなかった地域の方も寄ってくる。そして、その方たちが元気になっていく。子どもたちが将来帰って来た時に、何も無いところではなくて、あのおじちゃんたちと一緒に、今度は俺がこんなことをやりたいんだという、主体者となって帰って来る可能性が上がるんじゃないだろうかということを妄想しながら、益田ではカタリ場をはじめ、さまざまな対話を通した人がつながるプログラム、そして、地域での公民館を拠点とした、小学生中学生の地域活動をするという場をたくさん設けました。

7. 子ども・大人・地域の変化—ベースとしての地域

(1) 子どもたちの変化

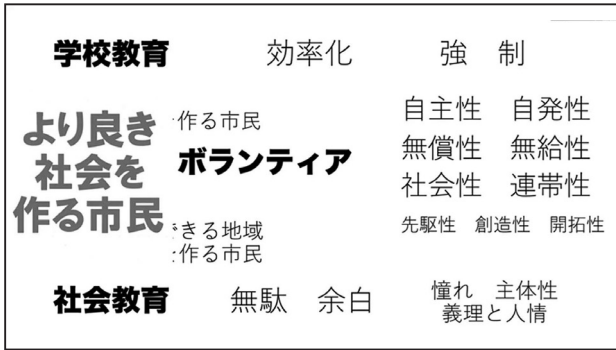
その結果、子どもたちの成人式での反応も変わって来ましたし、劇的に変わったのは、実は中学生でした。僕たちの最初の見立てでは、保育園で地域の中でどっぷりといろんな体験した子どもたちが、中学生になって、今度は総合的な学習の時間で地域のことを知って、地域のことをみんなに伝えるような勉強をいっぱいやる。中学生になったら地域の人たちみたいな活動をしたくなって、高校生になったらはじめて大人と対等になって、一緒になって地域活動をするようになるんだらうと思っていたんですけど、何のことはない、中学校で花開きました。

保育園、小学校でしっかり地域の活動を地域の方々とともに経験をした子どもたちは、中学校2年3年になってくると、先輩の姿を見ながら、僕たちも地域の中でいろいろなことをやりたいと言い出しました。今、5か所ほどの公民館の中に中学生たちのグループができて、地域活動をする子どもたちが増えています。

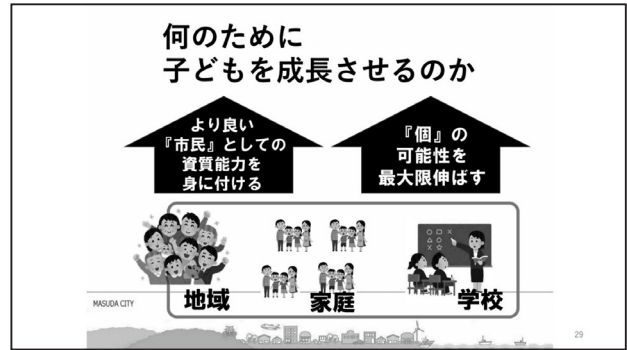
(2) 大人たちの変化

中学生が活動する地域は、地域の町づくりの団体が元気になっています。地域の町づくりの団体では、おじさんたちが頑張っています。あと10年も経てばおらんかもしれんと思うような方たちが、頑張っています。本当に頑張っています。でも、後継者がいない。なかなか50歳代が来んのじゃあとか言っているのだけれど、中学生がそうやって地域活動に参加する。そういった地域のおじさんたちは、この子らが帰って来るまでは、まだまだわしは止めんどと言って頑張ります。こういうふうには実は子どもたちの存在というのは、どんどんどんどん大人たちをつなぎ、そして結果的に大人たちを元気にしていっています。

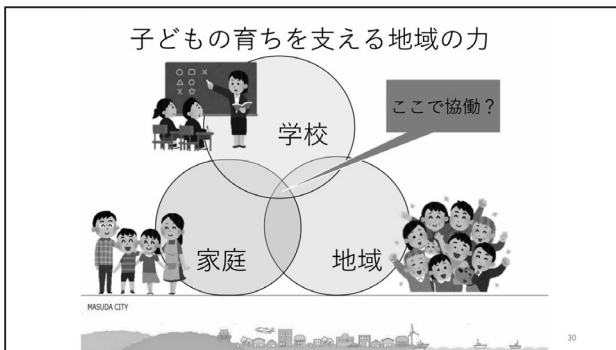
ボランティアとは何か。もう少しボランティアというものをきちんと考えて、ボランティアで、何か手間で使われたということではなく、市民活動が子どもたちの育ちをつくっている、ベースになっているということ、もう少し理解してもらわないと。最初に言いました。僕はなぜ市民活動でボランティアをしているかと言えば、僕自身が必要とされているということを実感しているか



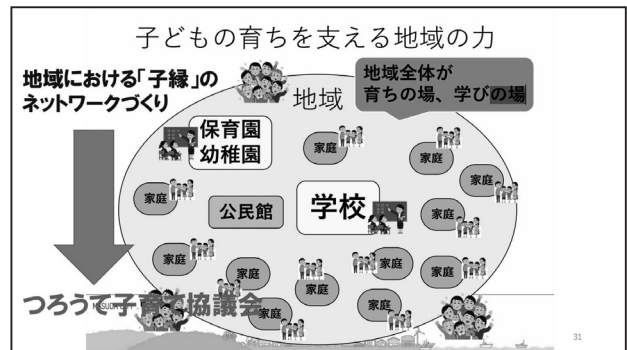
【図 1-19】 ボランティア



【図 1-20】 何のために子どもを成長させるのか



【図 1-21】 子どもの育ちを支える地域の力



【図 1-22】 子どもの育ちを支える地域の力

ら。やりがいがあるからです。そういったところ、地域のおじちゃんおばちゃん、じいちゃんばあちゃん、兄ちゃん姉ちゃんたちが、子どもたちとともに活動することが、いかに地域の未来にとって大事なことなのかということを実感できるようにやっていけば、どんどんどんどん変わっていくのではないかと考えています【図 1-19】。

（3）ベースとしての地域

今の学校は、みんな個の可能性を伸ばすところは、しっかりやっていますけれど、図の左側のところ、より良い資質・能力をつけるというところは、なかなか難しい状況になっています（【図 1-20】）。どうしたら良いのか。ここで考えなければならないことは、この図で物事を考えるから難しいんだと。益田市ではこの図を廃止しました。平成 26 年に僕が 2 度目に益田市に入った時、この図を全部消しました（【図 1-21】）。

そしてやったことは、すべての基本は家庭であると。1 人の家庭もあるし、2 人もあるし、3 人もあるし、5 人

も 6 人もある。でも、基本は家庭である。その家庭が一定の地域にたくさんあって、住んでいる。これが地域です。人がいなかったら、コミュニティは存在しない。その家庭に子どもがいるからこそ、保育園、幼稚園、小学校があるんです。

学校を中心に据えてしまっている。地域に子どもがおらんかったら、学校は存在しないんです。なぜ学校を中心に考えるんですかと、僕は思います。地域の方がいて、そこに子どもがいるから、学校は存在するんです。子どもがゼロになったら、学校はなくなるに決まっていますか。学校に頼るのではなくて、コミュニティが学校というものを成り立たせている。

コミュニティ・スクールの基本はコミュニティです。なのに、学校を中心にスタートするから、学校は、また俺たち何かやらされるのかと思うんです。だから、学校外の活動が豊かでないのなら、コミュニティ・スクールなんかやってはいけません。

益田の学校外の活動が豊かな地域では、それが豊かであればあるほど、「つろうて子育て協議会」という、子どもたちが学校外の活動をするネットワーキングをつ



【図 1-23】 公民館職員による仕掛け&伴走

くっています。そして、そうした地域では、コミュニティ・スクールになるための学校運営協議会のメンバーは、「つろうて子育て協議会」から推薦された人になるという規則にしています。地域で子どもたちと活動していない人は、運営協議会のメンバーにはなれません。意見ばかり言うようなおじさんは困るんです（【図 1-22】）。

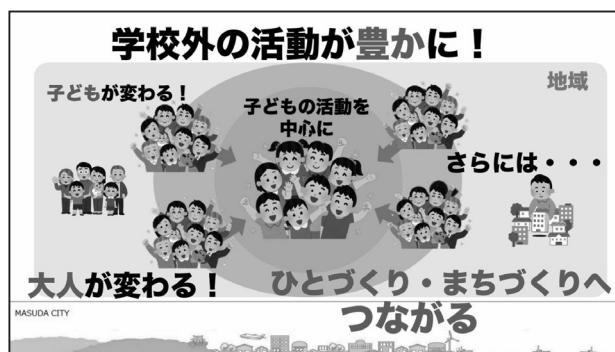
そうすると、学校運営協議会だというから来たぞ。お前、不登校がいるという話はどうかなって質問は出ないんです。子どもが挨拶せんのはどうかとか、言わないです。やあ地域の行事、子どもよう来るで。挨拶もしてくれるけど、学校はどうか。学校でも子どもは挨拶していますよ。ああ良かったな、良かったな、とか。いやいやちょっと、学校行事がいっぱいになって、昔から学校でやっている豆腐づくりが今は大変なんです。そうかそうか、なら、それは公民館でやりゃあええじゃないか。わたしのグループでやっちゃうでというような話が出ると、学校は楽になるでしょう。こういう話ができる場にならにゃいけないのに、全国各地、学校に意見を申すような人たちが来るような学校運営協議会を平気でつくっています。

ベースは、地域。学校まかせ、親まかせにしないような、地域の中で子どもの活動。子どもたちは、将来、この地域を幸せな地域にする担い手になるんだ。そのために俺たちと一緒に活動していくんだ。そして一緒に活動したら、何か俺元気になったぜというような動きがたくさんできていけば、地域の方たちも安心じゃないですか。そういう流れにもっていかないと、給料ももらわないで、地域の中で子どもたちと活動するっていう人たちは、なかなか出てきませんし、本気にならないですよ。

こんな活動をいっぱいやってきました。いっぱい



【図 1-24】 学校外での活動の広がり



【図 1-25】 地域での活動が豊かに！

ばいやってきましたので、後で見てください（【図 1-23】）（【図 1-24】）。

いろいろな活動を、世代をつなぐということでやっていく。地域の方々に対しては、将来のあなたたちの地域の担い手ですよということを言いながらやっていくと、理解も得ることができる。子どもを中心に据えると、地域の人たちも集まって来てくれる。子どもと活動をすると元気になる。まだまだやらなあかんとって、ちょっと休もうと思った人たちも元気になっていく。そういうようなことが起きています（【図 1-25】）。

8. 開花する中学生たち

(1) 「町の幸福論」を基点に学校と公民館の連携で開花する中学生たち

益田では、小学生も地域に出て活動しています。国語の教科書は東京書籍のものを使っているんですけど、6年生の説明文の中に「町の幸福論—コミュニティデザインを考える」という、Studio- Lのコミュニティデザ

イナー、山崎亮さんの文章があります。それを、子どもたちは勉強します。益田では、6年生がそれを勉強したら、その後に、総合的な学習の時間で、自分たちの校区をみんな元気にするには、どんなことをしたらいいかというプロジェクトをつくるのが定番になっています。子どもたちが計画を立てて、その後、発表会をします。学習発表会で発表をするんです。ふつうはそこで終わります。いや、良い計画立ったね、と。

でも益田では、その後、次に公民館の人たちが学校に行きます。館長と主事が学校に行って、すばらしい発表だったね。今度、このプロジェクトを、公民館で実際にやろうじゃないかと言います。そうしたら、半分くらいの子どもが公民館に行きます。休みの日に。それで何週間かけて、地域の方たちと一緒にプログラムを考えて、実際にやるということをはほとんどすべての小学校でやっています。

そうすると子どもたちは次にどうするかというと、公民館に行って、今度、地域で祇園祭というお祭りがあるんだけど、僕、そこで何かしたいんですけどと言いつつ出てくる。良いね良いね、なら手伝ってよ。いやいや、僕は店を出したいんです。そうかそうか、なら店出せば良いと言って。じゃあ、あのおじちゃんを紹介してあげるけん、一緒にやったらというような、紹介してもらって店を出すといったことも出てきて、小学生が地域のいろいろなお祭りや活動に出るようになりました。

中学校に上がったから、もっとやりたくなるから、もっとするじゃないですか。中学生がどんどん地域に出て来るようになって、中3になった時には、こんな子になっていました。これは、益田地区という、益田で一番古い校区の学校の地域の方との研修会の中で、突然司会者に前に出されて何か話してくれと言われた中学校3年生が、話したことです。ふつう、話せないですよ。打ち合わせゼロで話した3人の中学校3年生の子どもの映像です。

【動画】益田地区「WILLの会」開花した中学生たち (2021.12.4)

■活動の積み重ねの中で感じた「益田市」

中学生：「田舎ならではの、他の地区にはない大人とのつながりが、すごい活発に行われていて、施設とか物と

はまた違った、別の魅力がすごいあふれている町だなんて感じます」。

字幕：他の地域にはない、人と人、子どもと大人の繋がりがあがる。大型商業施設とは違う地域の魅力がある。

中学生：「益田をもっと盛り上げたいと思う人が多くて。たとえば、大人だったら最近だと、「おどいの宴」^⑥ だったりとか、私たちの下の学年の東の1年生は、日本遺産のスタンプラリーを企画したりとか。いろんな人たちが、益田をもっと盛り上げたいと思う人が多くて。たぶん、普通じゃあまりないと思うので、それはすごいなって、本当に思っています。

字幕：ロールモデルとなり得る魅力ある地域の大人がいる

■地域活動の中で身につけた力

中学生：「大人は、やっぱり自分たちが持っていないのをいっぱい持っているの、それを、話をしてく中で感じ取れるのが、とてもおもしろいと思いました。なので、その分、小さな頃から大人と話すことに慣れているというか。今までに身に付けてきたかなと思っています」。

字幕：自分たちにはない経験値を大人はたくさん持っている。「知らない」「分からない」を不安に思うのではなく、楽しめるようになった。小さい頃から、大人と話す事に慣れてるのはすごく得だと思っています。

中学生：「話し合いの場の時に、私は自分の主張ばかりを言うてしまう時があるんですけど、話し合いを進めていくごとに、いろんな意見を聞いたりして、折り合いをつけながら話し合いをする力を私は身に付けたと思います」。

字幕：自分の意見ばかりを主張していた過去の自分。色々な価値観を持つ方々との対話の中で、折り合いをつけながら対話をする力が身に付いた。

中学生：「私は小さい頃は人見知りというか、同級生の子とは話せるけれど、大人の方は一切話せないって感じだったけれど、小6からの地域活動で、最初はやっぱり、ちょっと怖かったけれど、いざ話かけてみたら、とても優しく対応してくださったり、どんどん話や質問をたくさんしてくれたり。それで自分も最近、あれちょっと人見知りがなくなったかなとか思うようになってたり、コミュニケーション能力がとても上がったと思います。

字幕：幼い頃から「人見知り」が強く、仲の良い友達としか話ができなかった。最初はやっぱり怖かったけれ

^⑥「益田歴代のお殿様達が生活していた『三宅おどい広場』を舞台に、地元のいいものにたくさん触れ、堪能しながら益田の歴史を紐解いていく集いの場」(https://masudashi.com/event/ai lec_event-60629/ (2024年1月7日確認))。

ど、地域活動を積み重ねる中で、最近、自分自身を振り返ってみると「人見知り」がなくなったように感じる。「コミュニケーション能力がとても上がっていると思います」。

■地域の大人に伝えたい私たちの気持ち

中学生：「大人の方の考え方はとてもおもしろくて、自分の考え方とは真逆でも、さまざまな意見があって、それをどんどん自分のものにしていけば、これからもっと楽しい活動ができるので、もっとこのような場を増やしてほしいです」。

字幕：大人の「ものの見方や考え方」は、とてもおもしろいと感じる。多様な「ものの見方や考え方」を自分たちのものにしていきたい。そのためには、たくさんの地域の方々とお会いすることができる場を増やして欲しい。

中学生：「会社に就職するときに、履歴書に自分の出身を書くとして、鳥根県益田市出身ですって書いたら、君、益田市出身なのっていうふうに、たとえば、言われるとか」。

字幕：会社に就職するために、履歴書に自分の出身地を書くとき、「君、益田市出身なの??」と言われるような街にしていきたい。

中学生：「私は他の市とか県とかについて、この益田市でやっている活動を私はそこまで特別に思っていてなくて、でもやっぱり外を見てみたら、他のところとかは、やったこともないし、そういう話題もないみたいな感じをいろんな人から聞いて、やっぱりすごいことで、とても特別なことを今やっているんだなって」。

字幕：私は「当たり前」だと思っていた活動が、他の地域に出ると「当たり前じゃない」「有難い、特別だ」ということに気づいた。

中学生：「自分たちが地域の活動や企画に参加できるのは、やっぱり地域の方々が自分たちと協力して、活動してくれるからであって、自分一人じゃ、やっぱり何もできないけれど、いろんな方々の支えがあって、今こうしていろんな活動ができていますので、本当にありがとうございます」。

字幕：私たちが地域で活動をすることができるのは、地域の方々が私たちに対等に接してくれるから。自分たちだけで活動することは不可能だった。色んな方々との「出会い」や「支えに」に感謝しています。

(2) 学力は学校で、実力は地域で

益田では、学力は学校で、実力は地域でと思っています

す。原稿も打合せもなく、突然ふられて、なぜこれだけしゃべれるのかと言ったら、やっぱり地域の中でいろんな大人たちと対等に、いろんな活動をやってきたから。しゃべっていますよね。自分でやっているから語れるんです。全員ではないですけど、経験した子たちは、こういう子たちになっている。この子たちが学校に帰って、学校の中でまた活躍するんです。そうすると、学校の中での子どもたちの活動も活発になってくる。

この子たちがいた益田東中学校というところは、今、子どもたちが、地域にすごいガンガン出て行っています。先生方にも、部活動をする土日もないと言われるくらい地域に出て行っています。そういう子たちが出てきました。全員ではないですよ。だけどそうやって、地域で頑張って成長した子たちが、学校に帰って影響を及ぼしている。またそれが学校の中の盛り上がりをつくっていつている。地域に出ることは良いことなんだと思う子どもや、応援する先生が出てくるという好循環も生まれてきています。そうすると、学校自身も楽になると思いませんか。

地域の人たちも、こんなふう子どもたちが地域に出て来てくれて、元気になったという人たちが増えてくる。この子たち、将来もしかして帰って来てくれたらいいなあと思うけれど、でも本当に帰って来るかもしれないなあと思い始めたら、いや、この子らが帰って来るまでちゃんとしとかにやいけんなあ、という気になるじゃないですか。帰って来やせんでと思っていたら、まあええや、わたしの代で終わってしまえと思うけれど、いや帰って来るという希望がもてたら、地域の方たちも、もうひとふんばり頑張ろうぜというふうになるんだろうなと思っています。

豊川という地区の話ですけど、実はそうやって地域の方たちが、帰って来るといった子どもたちのために、もっと頑張るといって、そういうおじいちゃんたちが出てきた地域もあります。こんなふうには、実は学校外で子どもたちが活動するということは、子どもたちが成長すると同時に、実は大人たちにとっても、将来の希望をもてる地域になってくるということです。そうすると、大人たちも、子どもたちとともに活動することで、もっともっと本気になるという好循環が生まれてくるということになるのだろうと思っています。結果的に、さっきの190日が豊かになっていく。それを豊かにするための大人たちがどんどん増えてきているのだろうと、私たちは思っています。

9. 西益田の灯火祭（ともしびまつり）

象徴的な地域があります。最後、その映像を見ていただいて終わりたいと思います。西益田というところです。地域と学校がいろんな活動をして、コミュニティ・スクールにもなっています。子どもたちが、地域の方たちと一緒にイベントをつくっています。カオル君という男の子が、4年前、コロナ禍で学校が休みの時に、元気がなくなった地域の方たちのために、地域を元気にしたいと言って、公民館に行ったのがスタートです。僕たちにできることはありませんかと言って。

そうしたら、公民館の方が、町づくり団体の若者たちのグループのところに行って相談してごらんと言って。そこに行って、みんながコロナ禍でも元気になるイベント、お祭りをみんなで作りたいと相談して、みんなと一緒に喧々囂々やって。その若者たちも、子どもたちと遠慮なしに、がながながん話した結果、灯火祭（ともしびまつり）という、竹灯籠の祭が生まれました。800人以上を集めて大成功で終わって。それを見た後輩たちが、私もやりたいと、2代目がやったのが今からお見せする映像です。

去年は、1200人集めた3代目。今年は11月3日に4代目がやりました。4代目は、中学生と大人だけではなく、卒業した高校生も小学生も実行委員会に入って、小学生から高校生、若者までの実行委員会で灯火祭をやって、4回目も大成功に終わったと聞いています。

中学校の校庭でやるんですけど、中学校の中に車を停めます。象徴的なのは、駐車場整理の旗を振るのが地域のお歴々なんです。自治会長とか公民館長。そういったみなさんが、子どもたちの活動のために旗を振って、駐車場係をやっています。そうやって子どもたちは、いろんな方のおかげで、僕たちがやりたいことを実現できるんだと思いながらやっている。その地域の方たちも、子どもと一緒にやらないといけんのじゃ。子どもも大人も町づくりの主体者なんじゃと、この地域では言っています。豊川という地域でも、子どもも大人も町づくりの主体者だと言っています。子どもが一人前に扱われて、一緒になって力を発揮できると、子どもは一気に成長するということがあります。

映像の途中で、公園を改造するという話も出てきます。みんながバスを待つ時に使っている、自治会が管理している公園をきれいにしたいという子どもたちの提案を受けた公民館が、自治会長とつなぎました。自治会長

は、ふつう公園のことはもう、わしらが市議員と一緒に行政に行って頼んで直してもらおうんじやが、それやっちゃだめなんじや。子どもらと一緒にやらにゃ、子どもら帰って来んし、一緒にやったら子どもらがいづまでも残るけえのう、と。僕のところに来て、大畑、補助金ないか。ありますと言って10万円をあげて、芝生を植えたり、ペンキを塗ったりして、公園をきれいにしました。そういった物語が途中に入っています。

そして最後、灯火祭。2代目の時には、天気予報は1週間前から100%雨でした。でも、当日は見事に奇跡的な日本晴れ。これを西益田の奇跡と益田では呼んでいます。途中、てるてる坊主が出てきます。なぜかという、天気予報が雨だったんです。子どもたちがやっている様子。途中から、経過もありますので、ご覧ください。

【動画】「保幼小の積み重ねの上に開花する中学生たち」

中学生：「自分たちがこうやって会議に参加することによって、それぞれ学校では、あまり経験できないし、計画を自分たちが一から考える力とか、それを人に発表する力とか、そういうところが学校より、学校に通っている人たちより、こういうところに出たりする人たちの方が、きっとそういう場もたくさんあると思うし」。

字幕：学校では、あまり経験できない計画を自分たちで一から考える力。それを他者に伝える力。学校よりも、学校の外の方がより多く経験できる。

豊かな『学校外の活動の場』で生まれる憧れの連鎖

『私』の考えたこと『僕たち』の考えたことが

『まちの仲間』として対等に接してくれる大人と共に

またひとつまたひとつと実現し、カタチになってゆく
たくさんの『ありがとう』に包まれて生まれる、次の『やりたい』

『やりたい』気持ちが紡ぐ地域の大人と大人

引き出される新たなアイディアと意欲

笑顔とともに踏み出す次の『一步』

地域の人と繋がり関わりを増やしたい

地域の活動に興味を持ってもらいたい

私たちの活動で地域を盛り上げたい

繋がりを深め、広げるために躍動する子どもたちと

出逢い、支えながら躍動する大人たち

2021年11月7日 西益田 灯火祭

西益田地区内の4園、小中学校、特別支援学校、高齢者福祉施設など

思いと願いが込められた竹灯籠は1,500本を超え



【図 1-26】「保幼小の積み重ねの上に開花する中学生たち」

来場者は 1000 名を超えました

一つひとつの竹灯籠の灯が重なり拡がっていくことで地域全体を明るく照らす

そして一人ひとりの笑顔を繋げることができる

『誰かのわがまま』だと思っていたことが

実現するまち西益田

中学生：「学校っていう場所だけに留まらず、自分たちを育ててくれたこの地域をどんどん盛り上げていきたいなということで、地域を支えられる学校にしたいなという考えです」。

字幕：学校という場所に留まらず、自分たちを育ててくれたこの地域をもっと盛り上げていきたい。地域を支えられる学校にしたい（【図 1-26】）。

丁寧に子どもたちと大人を会わせて、丁寧につないで、あせらずにやって、ワクワクがたまるまでしっかり一緒に話したりする機会を設けて。やりたくなったら、うちは公民館が拠点となって、そこの人たちが上手にならしていくということをやり続けた結果です。

今、5つくらいの中学校が目覚めてきたかなと思っています。中学校は9つあるので、まだまだ目覚めていない地区もあったりするんですけど、この輪を広げると、もっともっと、子どもたち自身が活動すると同時に、地域の大人たちも、ああ、この町も将来、人は減るかもしれないけれど、元気な地域、中山間地域になるかもしれないという希望をもって、今を元気に生きていくような町づくりにつながるんじゃないか。そうした希望をもちながら、今、私は、市民サイドで若者たちと一緒に、いろいろな活動づくりをしているところです。

地域学校協働活動の推進を図るメッセージ		
地域・保護者・学校・行政の方へ <small>(参考：R5農林総合「地域・学校づくりのついで」、講師：大畑 伸幸 氏より)</small>		
<ul style="list-style-type: none"> ○「学力は学校」、「実力は地域」でつける ○子供が地域を動かす(子供がしたいことを大人と一緒につくる) ○少年は必要とされて大人になる(子供扱いをしない) ○子供に失敗してもやり直すチャンス(体験)を与える大切さ 		
地域・保護者へ	学校関係者へ	行政関係者へ
<ul style="list-style-type: none"> ○「なぜ、地域が子供の教育に参加するのか」を考える→持続可能な地域づくりのため等 ○子供から地域の大人への憧れ(「将来、地域の人みたいに、地域のためにやりたい」) ○大人がやるのは簡単だが、子供に何も残らない(だから子供と一緒にやる) ○子供が成長する機会が奪われている(学校、親任せにせず、地域でその機会をつくる) 	<ul style="list-style-type: none"> ○地域と子供を出会わせる(きっかけづくり)、地域で活躍した子供を称賞したりする役割が学校にある ○CSは学校の実態を地域に話し、子供、学校、地域をつなぐ 	<ul style="list-style-type: none"> ○「なぜ、子供たちが故郷に帰らないのか」を考える→人口減少問題の解決策の1つ ○カウンターパートを明確にする役割が行政にある

【図 1-27】地域学校協働活動の推進を図るメッセージ

10. おわりに

都会ではないモデルを、しっかりとつくっていく時代だと僕は思っています。ともに地方だからできる、まだまだ人のつながりが残っている地方だからこそ、できることがあると思っています。ぜひ、道東のみなさんと、これからも一緒になって、いろいろなアイデアを出し合いながら、ともにそんな活動をつくれたらと思っています。ともに頑張りましょう。ご清聴ありがとうございました（【図 1-27】）。

司会者感想（岡部真夢）

大畑伸幸さん、ありがとうございました。地域に子どもがいなければ、そもそも学校なんてない。加えて、1年のうち190日間、子どもたちは学校ではない空間にいる。そう考えると、それぞれの人生、たくさんの生き方をしている地域の人たちが、子どもたちと関わって、子どもを育てるチャンスがたくさんたくさんあることに気付きました。

子どもを育てるキーワードは、つながり、憧れ。対話をしていくことで、自分の根っこにあった何かに気付き、思い出させてくれた人、理解しようとしてくれた人には、どこか親しみを覚えてという連鎖がつながりをつくる。そして、対話の中や学校の外にある活動の場で、こんな大人が地域にいるんだ、かっこいいな、そうなりたいな、という憧れが、次のこんなことやりたいなという活動へ。長い目で見ると、地域の将来に憧れがつながりをつくって行って、地域が元気になっていくことが分かりました。簡単にですが、本当にありがとうございました。

感想共有

■司会者

お帰りなさい。お時間となりました。みなさま、有意義なお時間をお過ごしいただけたでしょうか。大畑さんのお話を聞いての感想でもいいですし、ワークショップを通して、こんなことをやりたいということでも、この場で仲間を募っていただいてもかまいません。お話したいことがある方は、手をあげてください。いかがでしょうか。

■小野寺理江（釧路市地域おこし協力隊デジラボ運営コーディネーター）

話し合った結果、1月21日に、デジラボという場所で、大学生と地域の人とを出会わせるカタリ場のような企画をしようかなと。

その日にやることですけれど、東海から来た学生さんたちが会いたい人ということで、釧路の魅力を知ってる人とか、新しいことを始めようとしている人とか、いろいろ出していただきましたが、ひとまず、食べ物。釧路のおいしい食べ物を知っている人と、学生さんたちを出会わせたいなと思っています。なので、釧路のおいしいもの、食べ物を知っていますという方、私までお知らせください。

また、それとともに、大学生の方ですね。釧路のおいしい食べ物屋さんを知りたいよという学生さんも私まで。1月21日の予定を空けて、みなさん私のところまで来ていただければと。ひとまずスケジュールに組み込んでください。以上です。

■司会者

ありがとうございます。さっそく新しいものが作り出されている。素敵ですね。他に何か感想ある方いらっしゃいますか。

■江口彰（NPO 法人いきたす）

今のことについて、一つだけ。大畑さんか僕が言わないといけないのですけれど。カタリ場という名称を使うことについて、何か名前を考えていただければと。益田も札幌のカタリ場も、ライセンス契約があって使える言葉で、一応、商標上問題がありますので。新しい名前をつくっていただけると良いのかなと思います。すみません、業務連絡みたいですが。

■大畑伸幸

益田の中学生も、自分たちがやる時は、マシュマロトークとか、自分たちで名前をつけてやっています。勝手に



感想共有の様様

つくったわけです。早い者勝ちです（笑）。

■司会者

ありがとうございます。他にいかがでしょうか。真子さんのほうへお願いします。

■山田真子（北海道教育大学釧路校3年生）

大畑さん、お話しありがとうございました。私も益田に惹かれた一人で、2回ほど益田に遊びに行って、勉強させてもらっています。大畑さんのお話を聞いたのは今回が初めてだったので、益田の教育を改めて客観的に考えることができて、ああ、これとこれがつながっているんだというふうに、すごく学びが繋がった感覚になりました。まず憧れの人をつくるということが大事。それは、学校の人でも地域の人でも、すごく大事なことだと思っていました。

ワークショップでは、コーディネーターの大大先輩たちが集まってくださって、巻き込まれるってなんだろうというテーマでお話をしました。そこではやっぱり、その人自身を見るということが、すごく大事というお話をさせていただきました。ただ、この授業のこの部分に協力してくださいという、その場限りのものではなくて、その人だから良いんですという、その人自身をまず知ること。その人を巻き込んでいくためには、その人自身を見るということが、どの立場の人間にとっても、すごい大事なことだということを、改めて感じました。

また益田に遊びに行きたいと改めて思います。以上です。ありがとうございました。

■司会者

ありがとうございます。その人自身を見る。素敵なキー

ワードですね。あと2名くらいの方。お願いします。

■役場職員

本日はどうもありがとうございました。今回こういう集まりがせっかくありましたので、今後も何かしら、みなさんと関わり続けていけたらいいなと思っています。先ほど大畑さんの方からお話もありましたけれども、子どもたちと話す機会を設けて、その後もどんどん地域でつながりをつくっていくというお話もありました。なので、我々もそれにならって、どんどんこれからもつながり続ける。

せっかくこれだけ、教育、子どもたちのために何とかしたい、町づくり、町のために何とかしたいという思いをもった人たちがこれだけ集まっています。なので、今後もいろいろなイベント、地域のイベントだとかで、一緒に盛り上げていけたらいいなと思います。何か機会がありましたら、今後とも、どうぞよろしくお願いします。以上です。ありがとうございました。

■司会者

ぜひ関わり続けましょう。ここにいる方の顔を覚えて、あの時「地域教育創造フォーラム」で会った方ですねということが広がると嬉しいですね。他に何か感想がある方はいらっしゃいますか。ではお願いします。

■鈴木美咲（北海道教育大学釧路校2年生）

地域文化研究室の鈴木美咲と申します。ワークショップで考えたことを共有できたらしいなと思って、手をあげさせていただきました。私のグループでは、本当のワクワクって何だろうということについてお話をしていました。ワクワクという言葉は私が設定させていただいた

んですけれど、そこに集まっていただきました。私自身が今、ワクワクって何だろうということについていろいろ考えていたところだったので、設定させていただきました。その中で、いろんな方々のワクワクを聞けたり、ワクワクと失敗は紙一重だよねというようなお話を聞くことができたり、すごく楽しいひと時でした。

最後に、言っていたこと、私が本当のワクワクって何だろうと考える時に、自分がワクワクが分からないと言っていることさえも、ワクワクなんじゃないの。探究心という意味でワクワクなんじゃないのって言われた時に、私はすごいなるほどって思って聞きました。今、絶賛なるほどって思っている途中です。なので、この後、いろんな方々とまたお話できたら嬉しいなと思います。以上です。ありがとうございました。

■司会者

ありがとうございました。ワクワクが分からないのもワクワクなんじゃないか。ほっとする一言です。

グループワークの際、模造紙にいっぱいメモしてくださった方、また401教室の方には、ホワイトボードにメモして下さっているグループもありましたので、お帰りになる際、ぜひ少しだけでもご覧になっていただけましたらと思います。たくさんのご感想をありがとうございました。

さて、そろそろ閉会のお時間が近づいてまいりました。ここで本フォーラム全体を通してのご講評を、大畑伸幸さんからお話いただきたいと思います。大畑伸幸さん、よろしく願いいたします。

講 評

大 畑 伸 幸

どうもありがとうございました。一番得したのは僕だ
なと思ひながら、今日はお話しさせていただきました。
自分たちがやったこと、やっていることをこうしてみな
さんの前で話すということは、僕自身もやったこと、やっ
てきたことを整理できていると思っています。たぶん、今日
はみなさん、喜々としてとして、自分の思いや、やりた
いことを語ったりされたんじゃないかと思っています。やっ
ていること、やりたいことを語るということは、人に語
ることを通して、自分自身ですごい整理できる。振り返
ることです。でも、現実にはあまり語る機会はない。
頭の中で妄想して語るのではなくて、誰かを捕まえて、
俺はこれをやりたいんだぜとか、これをやったんだ
ぜという話を、どんどんどんどん、もう日常的にできる
ような関係性をどんどんつくっていくと、みんなが元気
になってくるんじゃないかなと思っています。だから大
畑、よくしゃべるんだと思いますね。家では無口なんで
すけれどね。

「ポツンと一軒家」とか、「なぜこんなものがここに」
とか、そういったようなテレビ番組が流行る時代背景
は、やはり、昔はいろんな人がお互いの人生を語り合
っていた。それが今は語り合えなくなってきたことにある
のだらうと思っています。人生を語り合うことを求めて
いる。製作会社の方に聞いたら、「ポツンと一軒家」は
もう過酷なロケなんだそうですね。安い製作費なんだ
そうですね。でも、すごい視聴率をとっています。やはり
今の時代の中で、みんなが求めていることは、こうやっ
て語り合うこと。人が考えていること、人の人生を聞
いて、えっそうなんだという、人の人生も自分がトレ
ースできるようなことが、とても楽しい時代になって
いる。だからカタリ場が成立しているんだらうなとい
うところに落ち着くのだと思うのですけれど。ぜひ、
しっかり語るといことを大事にしたい。それができ
れば、相手が言っていることを対話的に、肯定的に
受け止めるということが、みんなにとって当たり前
になってくる。そうなると良いのではないかと思
います。

今日みなさんがお話をしているところを回って
みると、みなさん、誰か言ったことに対して、それ
は違う、なんて言った方、一人もいませんでした
ね。こういう雰囲気子どもたち、大人たちの環
境としてあると、もっ

ととっても楽しい、やろうぜということが言
いやすくなりますよね。やろうぜと言ったら、誰
がそれやるんだとか言うおじちゃんが出てき
て。花でいっぱいにしてやろうぜ、もっとい
っぱいにしたいと言ったら、誰が水やりする
んだと頑張っているおじちゃん、いるん
ですよ。そういうことがなくなるんじゃない
かと思っています。なので、ぜひ語り合う。
語り合うならば、肯定的に語り合うとい
うことを風土にしたい。そのようになれば
なるほど、みんなが互いに語り合いなが
らという輪が波紋のように広がっていく。
そうしたことが、社会教育的な手法だ
と思っています。対話しながら進めるとい
うことを良いなと思う人たちが増えて
くる。そういったやり方をぜひ、社会
教育に触れた地域教育を進めるみな
さんに、その波紋のスタートになっ
ていただけたらと思っています。

美咲さんからお話がありました。ワクワクとい
うことですね。僕は養老孟司さんとい
う方をとても尊敬しています。大好き
なんです。今から十数年前に益田に
来て講演をされた時に、一番前の席
で話を聞きました。その時、僕が
一番感動した言葉は、今のワクワク
の話にもつながるんですけど、
ワクワクするけれど、その反面、
不安のドキドキもあるじゃない
ですか。でもその時に、やった
ことのないことをやろうとする、
一歩を踏み出すということ、
養老さんは、その時に、それが
勇気なんだと言われた。ああ、
勇気を持つということ、こう
いうところで発揮すべきこと
なんだなと思いました。

大畑、あれだけのことを無謀にやりや
がってと言われるけれど、僕は違
います。勇気がある男だと言いた
いとは思いますが、ぜひみなさん
も、ちょっとした勇気。初めて
会った方に、ちょっと声をかけ
てみよう。自分のことを語って
みよう。一緒にやろうと声を
かけてみよう。そういった勇
気を持たないと、ワクワクし
ても何も行動を起こさなくて、
ああ、やれば良かったとい
う人生になるんだらうと思
います。ぜひみなさん、勇
気を持って声をかけたり、
巻き込んだり、そしてとも
に一緒に語ったりとい
うこと。そういったことを
ぜひやってみてください。

社会教育が大好きな仲間として、今
後もみなさんと一緒にしたいと思
っています。今日はとても楽しい
時間を過ごさせていただきました。
ありがとうございました。

閉会挨拶

皆川敬太

(北海道教育庁十勝教育局)

みなさん、こんにちは。簡単に自己紹介します。3月まで、標茶高校で教員をしていました。13年間釧路管内にいて、途中からこの道東の地域教育をつくる会にも入らせてもらいました。今は十勝教育局というところで社会教育主事をしています。

ずっと札幌に住んでいて、大学を卒業して標茶に来ました。最初は中学校の教員だったんです。部活と英語の指導と、あと学級担任。これを頑張っていました。ふと、隣の標茶高校を見た時に、中学校の時に発表とかぜんぜん苦手だった子が、高校に行ったら、すごい上手になるんですよ。なぜかと思っていて。標茶高校は探究活動をすごく頑張っているんですけど、その秘密を知りたくて。標茶高校に行きたいですと言って、標茶高校に行かせてもらいました。探究の担当としてやっていた時に、社会教育という言葉に出会って、今は社会教育主事をやっています。ふらふらと生きています。

今日は大畑さん、本当にありがとうございました。大畑さんのお話の中で出てきた二つのキーワード、それから、私が今思っている一つのキーワードをお話して、今日は終わろうと思います。まず、必要とされるということについて。去年の12月、ある卒業生からインスタのDMでメッセージが来て、実は先生のおかげで、デザインに関する仕事に就くことができましたということだったんです。えっと思って。

卓球を指導していたんですけど、部活のTシャツをつくろうぜという話になりました。じゃあさあって。誰々さん、ちょっとこのワンポイントのところ、つくって来てよと言ったら、かわいいデザインを描いてくれたんですよ。業者さんと何度かやりとりをして、部活のTシャツができたんです。それがすごく嬉しかったんですって。そんなこと言われていなかったの、今は20歳になったその卒業生に言われて、自分自身もすごく嬉しかったんです。卒業してからもTシャツのデザインは変わってなくて、ぜんぜん知らない選手がそれを着ているのを見て、必要とされている感じがあって、嬉しかったんですって。そう言ってくれるのを聞いて、ああ、何か、今日、自分の中でここがつながりました。

二つ目、地域に出るというキーワード。これは高校に務めている時の話です。中学生の時に、友だちとうまくいなくて、学校を休みがちだった男の子。3年生の時に僕が探究のオリエンテーションやりました。先生すごくおもしろかった、俺頑張るわという話になって。標茶の魅力発信したいと。よくありますよね、こういうこと。魅力って何と聞いたら、水と空気おいしいとか言うんですよ。いやいや、まだまだ標茶のことぜんぜん知



閉会式の模様

らないわと言って。じゃあ、せっかく13年住んでいるから、いろんな所に連れて行ってよと言って、だんだん地域の人とつながっていったら、最後、僕、経済に興味が出てきたんですと言って。今、大学で経済を学んでいます。でも、中学校のときの知識がすっぱり抜けているので、あの、それさ、分数の計算間違えているよとか。そんな話を、今しています。

最後。今、みなさんの振り返りですすでに出ている話なんですけど、PDCAという言葉がありますよね。これ、society3.0—工業社会の時の言葉だとよく言われています。ミスが出ないように計画して、実行して、ミスがないかチェックして、ミスが出ていたら改善するという流れです。今はもうAARという言葉があって、anticipation、action、reflectionです。ワクワクする一見通しがたったら、アクションする。anticipationは「見通しを持つ」ですけど、その後、action、活動する。絶対ミスとかうまくいかないことあるからreflection、振り返りをする。これと、ワクワクと失敗は紙一重という言葉、まさにそうだなと思いましたし、さっき、名前は考えなきゃいけないですけど、1月21日に実行するところまでいく人がいる。なので、もう、こういう所に来て、だいたい人は良い話聞いたなあで終わると思うんですけど、もう実行してみようとしている人がいるということが、本当に素晴らしいと思いました。

大畑さん、本当に今日はありがとうございました。そしてみなさん、私もたくさん勉強できました。準備段階から学生さんたちが頑張っていました。学生のみなさん、本当にお疲れ様でした。今日、この後懇親会にも行きますので、興味ある人がいたら話しかけてください。興味ない人も話しかけてください。よろしくお願ひします。ありがとうございました。

地域教育創造フォーラム（2023）事後アンケート結果

地域教育創造フォーラム（2023）の実施後に Google Form にて事後アンケートを実施した。その結果 49 件の回答を得た。以下にその回答について示す。

1. フォーラムに対する満足度

- ・とても満足 38 名
- ・満足 11 名
- ・あまり満足ではない 0 名
- ・満足ではない 0 名

2. フォーラムに対する満足度の理由

フォーラムに対する満足度の理由について、自由記述で尋ねたものを内容に応じて整理した。整理の結果と記述例を以下に示す。

地域教育や地域と学校の関わりについて学ぶことができた
記述例：

- ・地域で子どもを育てるといふ本質を理解できました。
- ・まちづくりにおける地域と人（子どもと大人）の関わりについて、良い実例を確認できたため。

大畑さんの話・益田の話が聞けた

記述例：

- ・大畑さんから社会教育に対する強い情熱を感じることが出来たから。
- ・益田の新しい教育のあり方、地域のあり方について学ぶことが出来たから。

様々な立場の人の話を聞くことができた

記述例：

- ・ワークショップがとても楽しかったです。いろいろな人の話を聞いてとても勉強になりました。
- ・グループ討議で色々なグループメンバーの意見が聴けて有意義な時間であったから。

新しい視点やアイデアを見つけることができた

記述例：

- ・自分の知らないことや、自分では考えつかないようなアイデアを聞けたことがとても役に立ったから。
- ・新たな視点や考え方を共有できたため。

3. 講演を聞いて益田に行ってみたいと思ったかどうか

- ・とても行ってみたいと思った 31 名
- ・やや行ってみたいと思った 18 名
- ・あまり行ってみたいとは思わなかった 0 名
- ・行ってみたいとは思わなかった 0 名

4. 今後のフォーラムで聞いてみたいテーマ

今後のフォーラムで聞いてみたいテーマについて、自由記述で尋ねたものを内容に応じて整理した。整理の結果と記述例を以下に示す。

道内や地方の事例

記述例：

- ・地域との協働に関して、全国的な事例とともに、道内

の事例も聞けると嬉しいです。

- ・道東に戻ってきた若者の話、地域教育が本格化する前から地元に残る選択をした方の話を聞きたいです。地域愛とかも気になります。

都市部の事例や世界を視野にいれた事例

記述例：

- ・札幌など都市部における取り組み。
- ・「世界の中の地域教育」というテーマはいかがでしょうか。

地域と学校

記述例：

- ・地域の中に位置づいた学校の姿と役割。
- ・地域創生や地域活性化の先進事例。

カタリ場について：

- ・益田市のカタリ場のような取組を釧路でも実現出来たらと思いました。
- ・カタリ場をどのようなシステム（行政、民間の関わり方、予算等）でやるか

5. 「これからのわたし」「今後やってみようと思ったこと」

今回のフォーラムに参加して展望した「わたし」や「やってみようと思ったこと」について、自由記述で尋ねたものを内容に応じて整理した。整理の結果と記述例を以下に示す。

地域と関わる・地域を学ぶ

記述例：

- ・今まで以上に地域とつながる、地域人と参画する授業の構築。
- ・学校と地域とのつながりの架け橋になりたい。

様々な人とつながる

記述例：

- ・まずは「ひととひとが繋がる」ことを実践してみたいと思います。
- ・今回のお話をわがまちの地域の方々に聞いてもらいたい。そのためにできることやります。

自分の地域での実践

記述例：

- ・今行っているイベントに地域の大人と子供が対話できる場をつくる。大学生など巻き込んで、子供達に生き方のロールモデルを見せるカタリバのようなことをしたい。
- ・自分たちの街であった方法を見つけて聞いた話を元に行えるよう計画してみたいと思った。

様々なことへのチャレンジ

記述例：

- ・大畑さんの話から背中を押されたので、今後の大学生活やこれからの人生は、この言葉を忘れずにチャレンジしていこうと思う。
- ・世界を一人旅をする。途上国でボランティアをする。